

# 外陣講義文書

「第1講義文書」  
(0 = 0 プロベイショナー)

## 第12章

### 統合の神秘

- |             |            |
|-------------|------------|
| 1           | 祈りの方向      |
| 2           | 気概念        |
| 3           | マナ力        |
| 4           | 人体の中樞      |
| 5           | 自分の場所      |
| 6           | エーテル的呼吸の操作 |
| 7           | 神殿の封印      |
| 8           | 光体の育成      |
| 瞑想課題：ヤコブの梯子 |            |

THE OFFICIAL ORGAN  
OF  
I::O::S::

PUBLICATION IN CLASSES C~D  
IMPRIMATUR: M FRATER I::O::S::

First published in 1986 by I::O::S:: private edition (ver.1).

Second published in 1998 by Sekibunsha (ver.4).

Third published in 2005 online versions by I::O::S:: (ver.5).

This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).

All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013

# 知識講座

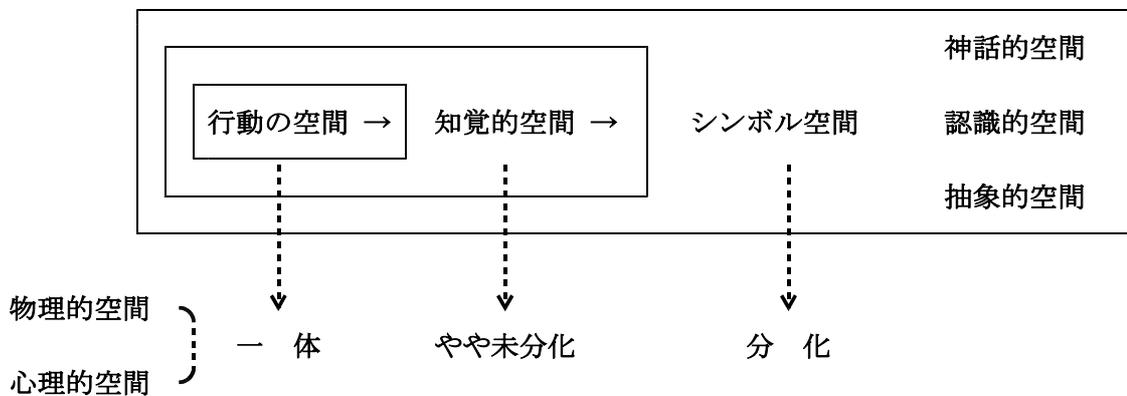
## 1 祈りの方向

### (1) 空間の認知

空間を議論するに際して、人間の把握する空間には、物理的空間と心理的空間があること、前者は認識の主体である人間を離れて実在する現実的な物理的存在であり、後者は認識の主体によって変化する空間であること、などの暗黙の了解を確認したい。

エルンスト・カッシーラーは、人間の空間の把握を整理し次のように説明した。

動物はすべて「行動の空間」を持っているが、人間は他の動物に比べて「行動の空間」に関して劣る分、「知覚的空間」については優れている。さらに人間のみが把握しているのが、「シンボル空間」である。これを通じて、「神話的空間」、「認識的空間」及び「抽象的空間」に到達する。



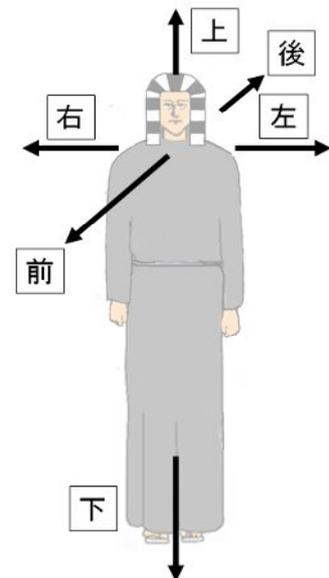
そして、上記の各段階における「物理的空間」と「心理的空間」との分化については、「行動の空間」では全く一体となっており、「知覚的空間」では分化の傾向が見られ、「シンボル空間」以降は完全に分化している。<sup>(1)</sup>

それでは人間の最初の空間把握となる「行動の空間」には、いかなる特性があるのだろうか。

行動の空間については、あくまでも観測点であり、行動の原点は人間本人である。その人間の前に開けた空間は、身体の構造から前後の軸と左右の軸とに分化することができる。

人間は他の四足獣とは異なり、直立した姿勢を容易に保持することができる。そのため、アフリカのサバンナに暮らす人類の始祖は、肉食獣の襲来を遠方から視認できるようになった。実際に四つんばいになると判るが、膝ぐらいの高さの地平線は数百メートルであるが、直立した人間は、障害物がない草原では、一挙に5キロ程度を見渡せる。騎馬を始めた人類は、視野に収める空間が数倍になることを学習した。<sup>(2)</sup>

人間はこの直立姿勢からいつでも行動を起こせる。そのため、人間の空間認識は、身体を中心線から発した自己中心的に符号化された世界として始まった。



(1) カッシーラー『人間 シンボルを操るもの』(岩波文庫) 岩波書店、1997年、129-133頁。

(2) アブラム・モル、エリザベト・ロメル『空間の心理学』法政大学出版局、1983年、45頁。

人間は周囲の世界を通じて自分の身体を意識するが、意識のなかで身体は世界の中心にあり、世界の軸となる。<sup>(3)</sup> アリストテレスは、観測者（人間）中心の六つの方位について、次のように語る。「あるものは上の方に、他のものは下の方へ、そして六つの方位のうち、その他の方向に向かって。」（フィジカ 208b）

従って、上下、前後、左右の六方位という概念は、この直立した人間の身体をめぐる自己中心的（egocentric）に符号化された位置と座標である。<sup>(4)</sup>

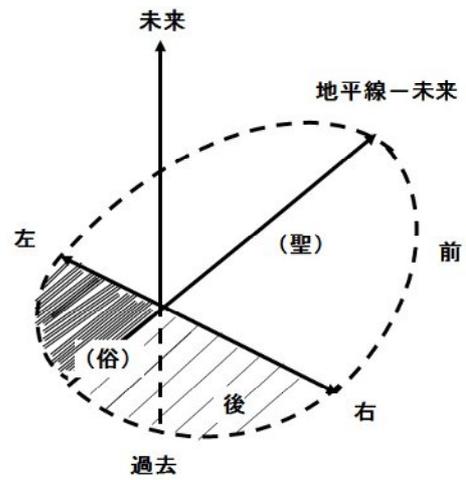
そして、人間の身体が向く方向によらず、一意的に決定される方向の概念は上下だけである。重力の中心、すなわち地球の中心が常に下である。<sup>(5)</sup>

一方、人間が向いた方向が前であり、その他の3方位は前に対して相対的に決定される。そして、前方と後方という概念は人間が到達すべき目標をもって運動しているとき、より鮮明になる。運動する者は「旅する人間（Homo Viator）」として、前方と後方との違いは空間的意味だけではなく、時間的な意味を代弁する。前方はこれからの人生（未来）であり、後方は過ぎ去りし人生（過去）である。

右図に示すとおり、身体から投射された空間は、前方と右方へと偏向する。未来は前方と「上」にある。過去は後方と「下」にある。<sup>(6)</sup>

前方の空間は見ることができるため「照らされ」ており、「明るい」とされる。後方の空間は、見るできないという理由だけで「暗い」のである。

ただし、方向と時間軸を結びつけるやり方は、時代と文化圏により異なる。古代ギリシャ人は未来のことを「背後にあるもの（オピソ）」と呼んだ。未来は未だ経験されていない世界であり、ギリシャ人はそれを背後ととらえたのだ。<sup>(7)</sup>



そして、これらの方向性は、移動の概念と結びついている。われわれは前方の明かりを目指して前進し、後方の暗がりを後にする。右利きが優位な大多数の分化においては、後方の闇も右側は比較的明るく、後方の左側はより深い闇である。古代ローマのト占官にとって、右は吉、左は不吉であった。<sup>(8)</sup> ドイツ語の「右（recht）」という単語は、「正当な（richtig）」と「正しい（gerecht）」という単語に結びついている。右側は優遇された側、正当な側として特別扱われ、左側は劣位の側と考えられている。<sup>(9)</sup>

そして、移動し始めた瞬間に、自分以外の他者や、地物の認識という行為が働き、自己中心性（egocentricity）のみでは空間認識が成立しなくなる。

そのため、空間は他者中心的（allocentric）なものに変化する。

しかし、空間認識の原点が上図で示すような自己中心的なものであることに変わりはない。

空間の認知は、自分の「ここ」を中心に生まれる。座標の原点である自己がいる場所が「ここ」であるが、ある領域を示す場合もある。

納屋で子犬を出産した母犬は、納屋を自己の有機的領域であると見なし、戸を開けて入って

(3) M. メルロー＝ポンティ『知覚の現象学 1』みすず書房、1967年、97頁。

(4) ナイジェル・フォアマン、ラファエル・ジレット『空間認知研究ハンドブック』二瓶社、2001年、16-18、40-42頁。

(5) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』せりか書房、1978年、45頁。

(6) イーファー・トゥアン『空間の経験：身体から都市へ』筑摩書房、1988年、54-57頁。

(7) 市川裕『ユダヤ教の精神構造』東京大学出版局、2004年、209-210頁。

(8) M. メルロー＝ポンティ『知覚の現象学 2』みすず書房、1974年、121頁。

(9) ボルノウ、前掲書、54頁。

くる人間を威嚇する。殆どの動物は自分の巣を守る。

人間はこの領域性を極端に発達させたため、家のなかで特定の椅子が家長の場所であったり、台所が主婦の支配空間であったりする。

エドワード・ホールは、上記を勘案し、自己からの対人距離を示す指標として声の届く範囲を想定し、静かな囁き声が届き、内密の対話が可能な3から6インチの「きわめて近い距離」から、屋外では百フィートに達する遠方から人に呼びかける「もっとも遠い距離」までの8段階に区分した。<sup>(10)</sup>

ホールは上記概念をさらに進展させ、「人間同士の相互作用において、人間は空間や距離を使い分ける傾向がある」という包括的な仮説を提唱し、人間の空間利用の問題・学説全般をプロクセミックス (proxemics) と呼んだ。

プロクセミックスを一般に「社会的対人距離」と意識されるが、「近接学」や「近接空間学」と呼ばれることもある。現在、プロクセミックスは、非言語コミュニケーション、空間デザイン、オフィスデザインの分野等に応用されている。

マジョリー・ヴァーガスはプロクセミックスを「私たちは誰でも「個人空間」と称されるいわば空気の保護膜のようなものを身にまとって生活しているのだ。この個人空間は、数多くの要因によって伸び縮みするのだが、この要因の中でもっとも重要なのは、私たちがみずから他の人たちとの間に認める関係の度合いである。」と評した。

ホールは、関係の度合いを自分を中心とした同心円として捕らえ、四つの距離帯に区分した。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1 密接距離 (0～約45cm) (intimate distance)<br/>身体的接触が容易。相手の匂いや温度を感じることができる。<br/>近すぎて相手がよく見えない。ささやきが聞こえる。</li><li>2 個体距離 (45cm～120cm) (personal distance)<br/>相手に手を触れることができる。相手がよく見えるが、口臭、体臭などは届かない。</li><li>3 社会距離 (120cm～360cm) (social distance)<br/>努力せずには相手に接触できない。仕事上のコミュニケーションに伴う距離。<br/>机を間にはさんで会話をするときによくとられる距離。大きな声が必要。</li><li>4 公衆距離 (360cm以上) (public distance)<br/>相手との個人的関与は低い。講義や演説など公式の場で相手と対面するときの距離。</li></ol> |
|--|

密接距離 (0～約45cm) には、実際に相手に接触する距離や、相手の体温・におい・息の音等を感じることでできる距離、手で相手の体のどこにでも触れることでできる距離が含まれ、人間と人間が密接な関係にある時の距離帯であると言われている。赤ちゃんを抱いた母親とか、恋人同士とかいろいろな状況がある。一方で例外もあるようで、満員電車の中では互いに乗客は密接な関係ではないが、密接距離のゾーンに体を置いている。これについてホールは「真の密接さを取り除くような防御手段を講ずる。基本的な戦術は、できるだけ動かないことであり、胴体の一部や手足が他の人に触れた時は、できれば引込める」と説明している。

密接距離では、相手の顔 (目、鼻、唇、舌等) は実物以上に拡大されて見えていて、時にはゆがんで見えていることもあるそうである。

(10) エドワード・T. ホール『沈黙のことば』南雲堂、1966年、233-237頁。

個体距離（45cm～120cm）は、立ち話、立食パーティーでの歓談、テーブルを囲んでの家族の食事、小さな会議机を囲んでの議論、バスを待つ時の人の列などにおいて人間と人間が自然にとる間（距離）であり、私的な間合いとも呼ばれている。ホールは「この距離では個人的な関心や関係を議論することが出来る。頭部は正常の大きさで知覚され、相手の表情はこまかいところまでははっきりと見てとることができると述べている。

社会距離（120cm～360cm）は、オフィスの机に座った人間と人間の距離（前後左右）、会議机に座った人間と人間の距離など、主に仕事の場においてよく見かける距離である。この社会距離では、相手の顔は正常もしくは縮小した大きさ（相手の姿全体がゆとりをもった大きさ）で知覚され、ビジネスの話など個人的でない要件はこの社会距離で行われる傾向があることが知られている。

四番目の距離帯である公衆距離（360cm以上）は、演説や講演を聴いたりする時の距離で、通常、相手の顔の全体・姿等は知覚できるが、実物よりもかなり小さく見える。この公衆距離では、声の性状は伝達できるが、相手の顔の細かな表情等のことばならざることばは殆ど伝達することは難しいことが知られている。

ホールの示した四層の対人距離は、自分の周囲に不可視の泡状の個人空間（personal space）が広がっているように思える。個人空間とは、身体を中心に一定の広がりをもつ身体の延長である。対人関係の親密度によって、個人空間は伸縮自在であって、もちろん本人の運動に伴って移動する。他者がこの泡状の内部に侵入すると、不快感、生理的な反発が生じる。

もちろん、個人空間は「なわばり」とは異なる。個人空間は本人の身体とともに移動するが、なわばりは地理的に固定された移動しない空間である。

人間の場合、個人や特定の集団が所有、占有している場所や領域がなわばりであり、具体的には自宅、庭、仕事場など、プライバシーが保証されやすい場所を指す。

## (2) 四方位

古典古代の文化をリードしたギリシャ人は太陽を生命の源泉であると考え、日出の場所である東は光、白色、上方（空）に結びつけられ、日没の場所である西は暗黒、下方（大地）に結びつけられた。そのためギリシャの神殿はすべて東に向かって建てられている。<sup>(11)</sup>

そして、前（1）項で述べたように、右手の側は東と太陽に同一視され、左手の側は『イリヤッド』にあるように、「もやのたちこめた西」と同一視された。ピュタゴラス学派の者たちは、「右」に限度を、「左」に「際限のないもの」という悪を結びつけた。<sup>(12)</sup>

ローマを支配していたエトルリア人（国家としては後に滅亡した。）は、新しい都市を建設する際は方位を重視した儀式を行った。生け贄とした羊の肝臓で吉凶を占ったあと、青銅製の肝臓のレプリカを掲げた神官が町の中心に陣取り、東西南北の二本の基本軸が交わる場所で、南に面する。

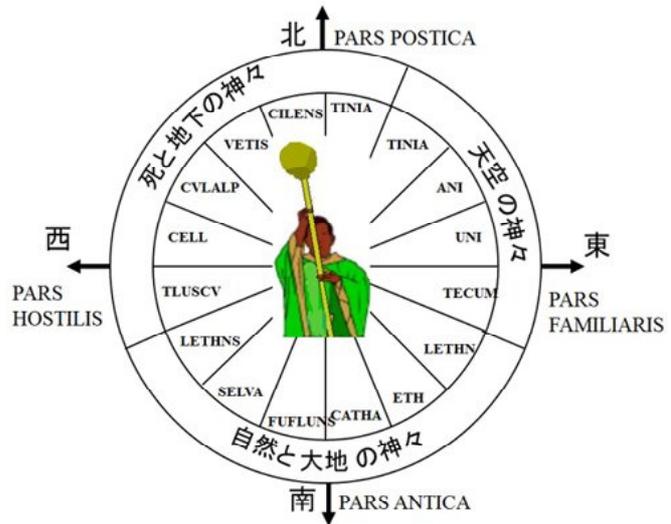
南（パルス・アンティカ）を向いた神官の背後は当然、北（パルス・ポスティカ）となり、エトルリア人にとり吉兆の方角である左側に縁起の良い東（パルス・ファミリアリス）が位置し、戦いの右手には敵意に満ちた西（パルス・ホスティリス）が位置する。<sup>(13)</sup>

ローマ人もこの感覚を共有した。鳥をもって占ったローマの神託官は、南を前方に北を後方にし、太陽の運行する東西線（decumanus）と東西線を縦断する南北線（cardo）との2線の分断と交叉を基本として天空を区分した。このように確立してきた「神話的地理学」において、南は夏と暖かさ、北を冬と寒さに結びつけ、当然のように東を朝日と、西を夕日に結びつけた。

ドイツ人は、家屋の南側の部屋を「真昼の側（Mitteagsseite）」、北側の部屋を「風雨を最も受ける側（Wetterseite）」と呼ぶ。方位に結びついた感覚は、現在でも続いている。<sup>(14)</sup>

人間には、自然のなかの幾何学的図形を認識し、頭のなかに抽象空間をつくりだす能力がある。北米インディアンのダコタ族は自然界のすべては円形でできていると捕らえ、南米インディオのプエブロ族は方形の空間に眼をやる傾向がある。その結果は都市計画にあらわれる。エトルリア人にしろ、ローマ人にせよ四方位の空間を矩形の都市に反映させたのである。<sup>(15)</sup>

この普遍的な概念が（魔術）儀式における空間感覚を規定する。垂直線における上と下、水平線における此方と彼方、そして中心と周辺である。<sup>(16)</sup>



(11) 空間認知の発達研究会『空間に生きる』北大路書房、1995年、222頁。

(12) トゥアン、前掲書、155頁。

(13) E. C. クラップ『天と王とシャーマン』三田出版会、1998年、40-42頁。

(14) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』せりか書房、1978年、64-65頁。

(15) トゥアン、前掲書、24-25頁。

(16) Catherine Bell, *Ritual, Theory, Ritual Practice*, Oxford : Oxford University Press, 1992, p.125.

### (3) 祈りの方角

われわれカバラの学徒は、「祈り」を神聖なるものと接触する手段と考えている。先の章で述べたように、ヘブル語で言うOMIDH「日々の祈り」のような、儀式動作を伴う定型化した祈祷はもちろん、場合によってはKVNH「指向性のある意識」のように無形の強い祈りや、ラビ・ナハマンの「沈黙の絶叫」などの極端な例を含めて、秘教的な祈りとして把握している。

人間が祈るときには、必ずその対象が存在する。それが人類社会の理想などの抽象的概念であろうと、目の前の偶像に象徴される神話的イメージであろうと、ある方角を向いて人は祈るのだ。多くの場合、その方向は祈る人物の前方やや上方である。

この場合、下に運ぶのは「神の計画書」であり、上に運ぶのは人間を含めた生命の「魂の叫び」や、或いは「魂」そのものの先導をすることもある。

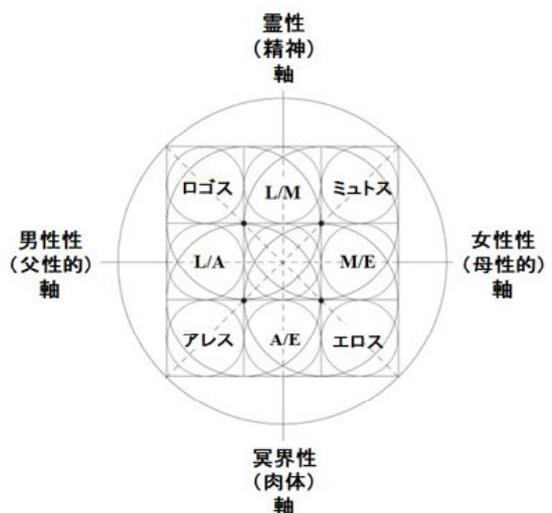
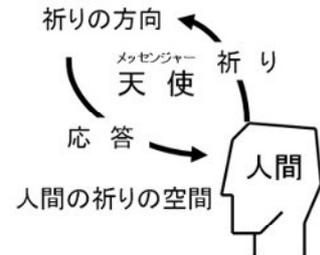
その意味で、この上下する「天使」というのは人間の「意識」の機能を代替するとも言える。上昇過程は、霊的に向上しようとする人間の意識の拡大であり、下降過程は物質の畏にはまり意識を閉塞して陥没していく様子なのだ。

人間の靈魂を幾つかの層に分けて考えることは、世界中で行われてきた。カバラでも三つ、または五つの靈魂の段階を説いている。それを心理学的に解釈して、精神機能別の「意識」の発展段階と捕らえることもできるが、ここでは素直に「霊的に進化していく人間の意識」と解釈してみよう。七つの地上世界の束縛を逃れた意識は、その進化の段階に呼応する七つの天球に遊ぶことができる。初期のカバラ修法者は、「戦車の技」という複雑な技法を用いた。しかし、これは簡素な祈りによっても達成できるのだ。そこに気づいた後代のカバラ修法者は、「恍惚のカバラ」と呼ばれる技法を編み出した。

さて、一般に訓練されていない人間の意識は居住環境に限定されている。多くのサラリーマンは、仕事とレジャーのことしか考えていないし、主婦は台所周りとお子のことしか話題に出さない。その精神空間はきわめて狭量である。いまや飛行機で数時間もあれば地球の反対側まで旅行できる時代だが、短期間の海外旅行をした人間が時差呆け（ジェットラグ）以外に、その空間の意味を考えてみるだろうか。普通の人間の心は著しく限定されており、宗教家、科学者、秘教の研究者などだけが精神を自在に拡大し、この「地上」の束縛を逃れることができるのだ。科学者は実験の成功と教授会の推薦ぐらいしか祈らないだろうが、宗教家と神秘主義者にとっては「祈り」は特別な意味をもっている。かれらは天の階層に入り込んでいかねばならない。神秘的修行をせず、ひたすら慈善活動と布教に努める宗教もあるが、それは教団の戦略に過ぎず、本来の宗教体験とは「聖なるものとの接触」、オットーの言う「ヌミノース」の体験である。「祈り」は、天と地を結ぶ手段である。「祈り」は、この宇宙の階層を突き抜ける一時的な意識の昂揚をもたらすのだ。

ただし、ここに異論がある。ロゴス的な前方視界、前上方から前下方、ミュトス的な後方の闇、上方から背後すべて下方というもの。或いは、それにアレスとエロスを加えて、さらに混沌とさせるもの等である。

祈りの方角は固定されたものではない。<sup>(17)</sup>



(17) Brian Skea, "Jung, Spielrein, and Nash : Three Beautiful Minds", in *Terror, Violence and the Impulse to Destroy*, Daimon Verlag, 2003, pp.335-352.

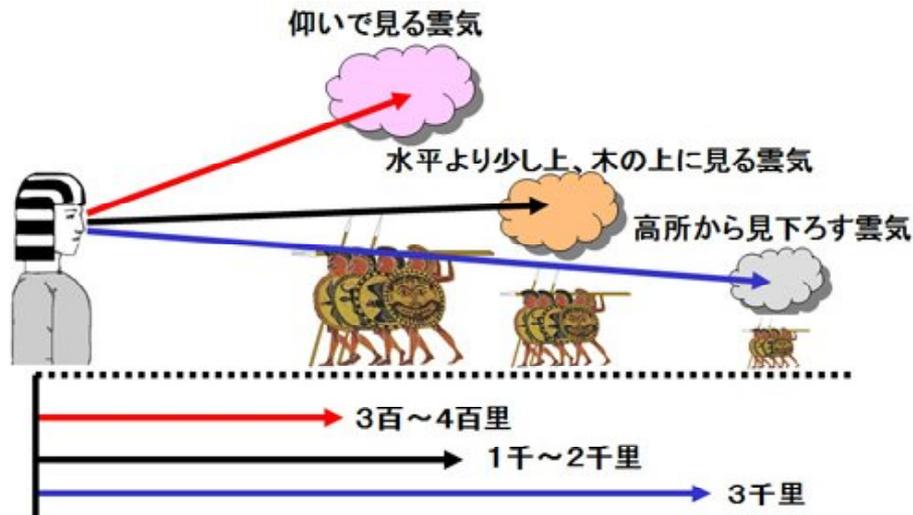
## 2 気

### (1) 気の源泉

われわれは「気のせい」、「気になる」、「気が合わない」、「気持ちが悪い」などと日常的に用いている。この「気」なる単語はどんな意味を有するのか。もちろん、中国でいう気功の「気」、インド哲学の「氣息」、古代ギリシャの「靈氣」はほぼ同じ概念を記述している。そこには万国共通の気に対する概念、空気のなかに充満し、人間の生命力と直結し、精神と肉体を仲介するエネルギーというイメージである。

ここでは中国の「気」の概念を検討してみよう。

後漢時代の許慎が著した『説文解字』には、「気」という文字の構成要素である「气」は「雲氣」であるという。雲氣は空中に浮かぶ雲であり、雲のように空中に現れる気のことである。面白いことに雲は肉眼で見えるが、移動する軍隊の上空に出現するとされる「雲氣」などは肉眼には写らず、「望気術」を心得た軍師の心眼にのみ写るのである。<sup>(18)</sup>



上図は望気術の一般概念を図解したものである。軍隊の行進する上には雲氣が発生する。導師が運氣を仰ぎ見るようであれば、行軍中の敵軍は三、四百里ほど離れている。ほぼ水平線上、楡や檜のような灌木の梢のあたりに見れば、千から二千里ほど、高いところに登り、下方に見て、地平線より咲先に続いているようであれば、三千里ほど離れていると判断する。<sup>(19)</sup>

つまり、気は雲のような蒸気のようなもやもやとしたものであった。

中国人はさらに一步思惟を進めた。中国には「肉」と「靈」の二元論などというややこしい対立の思想は存在しなかったため、物質とエネルギーとは等価であり、それぞれが「気」の位相の違いにより姿を変えたものと発想した。王陽明は天地万物が人間と「気」を共有するとして、これを「一気」と呼んだ。

天空の太陽と月でさえ、火の気と水の気を発している。それ故に漢代には、「日月傍気」として太陽の周りには紅緑の光輪を、月の周りには紅緑の光芒を描いている。<sup>(20)</sup>

人体は「形」、「魂」及び「魄」という三つの要素から成立しているが、これらも各々が「気」

(18) 高橋進「気」の思想と歴史『気と人間科学』平河出版社、1990年、66頁。

(19) 坂出祥伸『中国古代の占法：技術と呪術の周辺』研文出版、1991年、159-160頁。

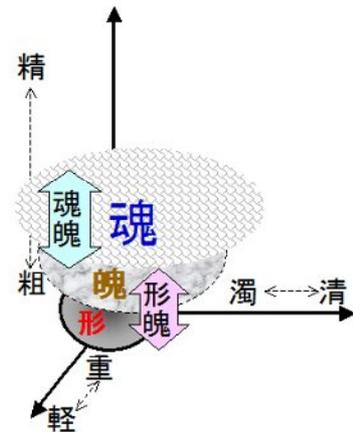
(20) 前掲書、12-13頁。

から生成されており、その純粋度（精・粗、清・濁、軽・重）の違いが、「形－魄－魂」という存在レベルの差位を決定する。

そして、精妙で、清らかく、軽い「魂」と、粗大で、濁っており、重い「形」との間を結ぶのが、両者の中間にある「魄」である。

魂と魄、魄と形とは連続しており、それぞれを「魂魄」、「形魄」と呼ぶ。つまり、「魄」は「形」と「魂」との間を揺れ動き、どちらとも親和する。<sup>(21)</sup>

西洋においても霊肉二元論とは別に、スピリトゥス、アニムス、コルプスという「霊」、「魂」、「体」の三分割が存在したが、スピリトゥスとアニムスの境は曖昧であり、さほど明確なものではない。



人間が死ぬと「形」は崩壊し、「魂」は天に還り「神」となり、「魄」は地に降り「鬼」となる。<sup>(22)</sup>つまり、「神」という「伸びて来る気」は、彼岸から此岸へ戻り来るものであり、「鬼」という「屈して往く気」は、此岸から彼岸へ帰るものである。

その関係は、次のように図式化できる。



そして、「形」－「魄」－「魂」という三つの位相は、気の存在レベルの違いであるとも言える。これを王梵志は「氣聚ればすなわち我となり、氣散ずればすなわち空になる。」と看破した。

(21) 三浦國雄『風水 中国人のトポス』平凡社、1995年、184-185頁。

(22) 「魂氣は天に還り、形魄は地に帰す。」(『礼記』郊特牲)

## (2) 気が流れる体

西洋では霊肉の二元論の立場から人間の肉体を物質、物体として捕らえた。そのため、西洋医学は人体を解剖して、個々の骨格、腱、臓器、神経系、循環器系などをパーツとして組み立てられる寄木細工のような人体を探求した。中国では、物質的肉体を「粗大身」つまり「見える身体」と呼び、死体を解剖しても分からない生体の臓器の上を流れる気のネットワークで構成される「見えない身体」を「微細身」と呼んだ。<sup>(23)</sup>

この「粗大身」と「微細身」との間を情報システムとしての「経絡」が走っている。

この身体の情報システムは、三つに分割される。<sup>(24)</sup>

- |                       |
|-----------------------|
| ① 身体と外界との関係に関する情報システム |
| ② 身体の状態そのものに関する情報システム |
| ③ 身体生命維持に関する情報システム    |

①の情報システムは、身体と外界の相互作用を仲介するものである。

例えば、前方から野球のボールが飛んでくるとする。目耳などの感覚器官から、高速で近づく小型の白い影、風切音などの視聴覚情報を感覚神経のインパルス（情報入力）として、情報処理系のある大脳に送り、四肢の筋肉を制御する運動神経に歩け、右に避ける、手で受け止めるなどの統合された命令（情報出力）が行われる。

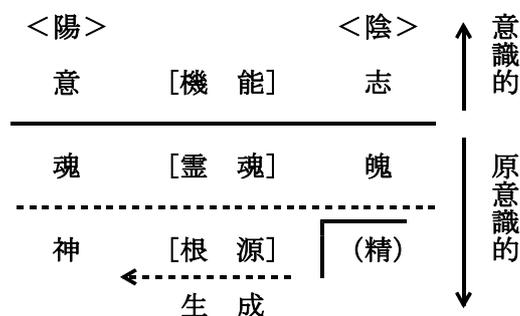
②の情報システムは、身体の気づきに関するものである。

そのひとつは身体運動に関する情報装置であり、手足の筋肉や腱に備わる運動感覚神経が、手足の状態を脳に送り、その状態に最適の運動指令を脳が手足に送り返すのである。これは①の外界に対する反応としての運動を支えるもので、「運動感覚（キネステシス）」に関する回路とも言える。もうひとつは、内臓感覚神経系で胃の痛みを感じる部分である。内臓の状態を感知する皮質部分が小さいので運動感覚と比べて内臓感覚は普段は意識されない。暗い意識の周辺部をなす「体性内部感覚（ソメステシス）」の回路とも言える。そして、キネステシスとソメステシスとを総合して「全身内部感覚（セネステシス）」という。

③の情報システムは生命維持に関する内臓機能の調整を行う自律神経系の回路である。

自律神経系は交感神経と副交感神経との二つに分かれ、呼吸器、循環器、消化器などの緊張と緩和とのバランスをとる。自律神経系による内臓のコントロールは無意識に行われる。しかし、脳が快不快の情動的反応により、ストレスという負のフィードバックを行った場合は、内臓器官の失調という形で反映される。

さて、次にここらについてだが、伝統的な中国思想では人間の心の構造は、心の表層を覆う自我としての「意志」、その下に広がる「靈魂」の層、さらに奥底には根源的な自己がある三層構造に捕らえている。これを図式化すると次のようになる。<sup>(25)</sup>



(23) 黒木賢一『<気>の心理臨床入門』星和書店、2006年、38、39頁。

(24) 湯浅泰雄『「気」とは何か：人体が発するエネルギー』日本放送出版協会、1991年、51-60頁。

(25) 石田秀美「気と身体」『気と人間科学：日中シンポジウム講演集』平河出版社、1990年、87-88頁。

### (3) 気 功

中国の気という、すぐに鉄棒を喉で曲げたりする派手なパフォーマンスの「気功」が思い浮かぶだろう（中国拳法を学んだものなら、「発勁」を思い起こすかもしれないが、後述する理由で意味が若干違う。）。

道教では老師の頃から「導引」と呼び、この内丹の錬成を行ってきた。かれらは一般に言われる「気」を「神、氣、精」の「三河」に分類した。「三河」とは、気の段階を示す言葉で、もっとも低い状態が「精」であり、肉体の本能と結びついた状態の気で、「氣」はそれが意識化された状態、「神」は神的段階にまで昇華された気を示す。<sup>(26)</sup>

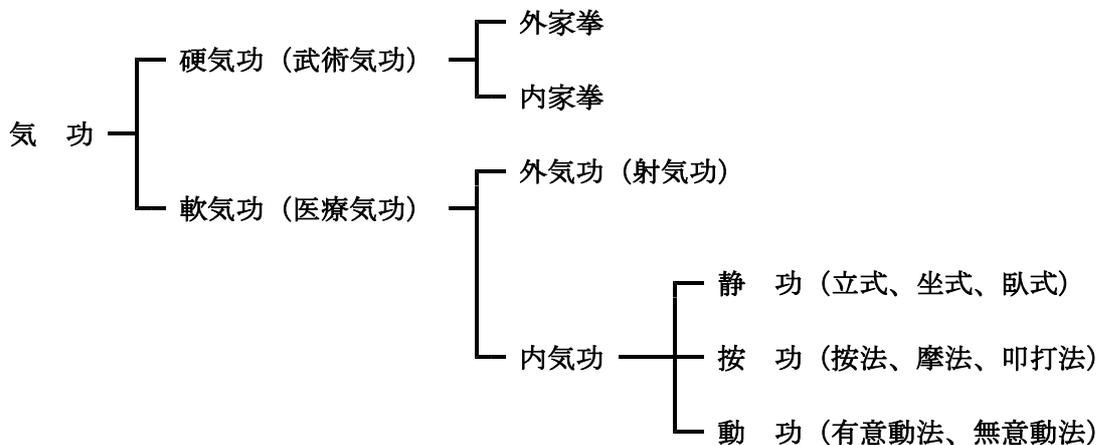
これを達成するために「調身」、「調息」、「調心」という三つの技法を行うのである。現代の気功は、これらの古い概念を統合したものである。

さて、「気功」という言葉が正式化されたのは意外に新しい。1954年に劉貴珍氏が、さまざまな名称を整理、統一し、学術用語として「**気功**」という言葉<sup>クイゴン</sup>を制定したのである。

この気功を大別すると硬気功と軟気功になる。

硬気功とは、前述した「鉄棒を喉で曲げたり」する武術気功である。気を巡らして肉体を強化すると刀で突いても、煉瓦で殴っても傷のつかない鋼鉄の肉体を得ることができる。しかし、これは武術としては高く評価されていない。人間の内気は流動的なものであり、その流動する力を柔軟に伝達するのが北派拳法で、筋肉の強化などの剛的運動に置換するのが硬気功を含む南派拳法だという認識があるからだ。経験的に、逆三角形の胸、筋骨隆々の南派拳法より、丸胴、細腕の北派拳法の方が人体のもつ潜在力を良く利用していると思う。例えば、形意拳の三種練法では、明拳、暗拳、化拳の三段階を経て用勁法を錬成するが、これは気の錬成と体術が渾然と一体化したものである。

そして、軟気功を中心に気功の種類を描くと、次のようになる。<sup>(27)</sup>



これらの気功法、特に内気功は瞑想を中心とした訓練で錬成することができる。

導引の説明に倣うと、調息という技法が最初に行われる。

東洋医学の心身理念によると、陽の気は身体の背面の経路を上から下に流れ、尾てい骨付近で陰の気に変換され、身体前面の経路を下から上に流れて全身を巡回するとされている。それを逆転させると著しく気を増強させることができるとされる。

(26) 湯浅泰雄『気・修行・身体』平河出版社、1986年、121-123頁。

(27) 湯浅泰雄、前掲書、193頁。

複式呼吸を行いながら、「逆法」で気を巡らす。陽気が背面を下から上に、陰気が前面を上から下に流れるように思念を集中する。この手順は、「小周天」という技法である。詳しくは関連書籍で当たってもらいたい。

発達した内気は、人体の「経絡」を通じて流れる。「経絡敏感人」というタイプの患者がおり、針で皮膚の一部を刺すと、その刺激が皮膚の内側を伝わる感覚がわかるというのである。その方向は古代中国で「経絡」と呼ばれていたものと同じであり、速度は非常にゆっくりしたものだった。もちろん、「経絡」は神経系とは別のルートを走っており、人体を解剖しても「経絡」に該当する組織は存在しない。「経絡」は生きている人間にしか存在しないのだ。そのため非物質的な器官であるとか、錯覚であるとか言われてきたが、心身相関の考え方からすると身体イメージのなかに存在する器官であるということもできる。誰もが自分の身体イメージを持っており、そのイメージが壊れると程度の差はあれ肉体にも傷が生じるのである。宗教的恍惚のなかで現れる聖痕や、呪文で落ちるいぼなどは心身相関の極端な例である。そこまで極端でなくとも、例えばアレルギー体質の人間はアレルゲンを想像しただけで皮膚にかゆみが走り、赤くなり、ぼつぼつが生じることがある。

鍼灸師はこの身体イメージのネットワークの上に鍼を打つが、そのとき指先に気を集中する。つまり、自分のイメージを患者に重ねていくのである。デビット・アイゼンバーグ博士によると、気を通さずに鍼を打つことは「ステーキに鍼を打つ」ようなもので意味をなさないと言う。

中国では早期に気功師（特異機能者）が、発功中に低強度の高周波の電磁波を発していることを観測していた。<sup>(28)</sup>

1988年に東京で開催された、日中平和友好十周年記念・国際シンポジウム「気と人間科学」においては、多角的な気功の研究発表がなされ、気の科学的測定の一環として、イメージ形成における脳波の変動、発功中の脳波変動、発功中の手のひらからの赤外線照射、外気の生体高分子（DNA、RNA水溶液等）への影響、外気の生物体（マウス等）への影響等が論じられた。

気功師は手や経穴から強力な外気を発するとされる。熟練した気功師の手は熱くなる。これは実際に測定してもそうであり、赤外線やミリ波が相当な量放出されていることを意味する。周知のごとく地球は巨大な磁石であり、われわれはすべてこの磁場のなかで生活している。この地磁気の強さは0.5テスラほどだが、ある気功師が2～3テスラの磁場を放射した例が計測されている。通常の人体の磁場はミリ・テスラ以下なので、気功師が操る磁場が大変なレベルにあるという。

---

(28) 1985年の王修壁らの実験（湯浅泰雄『気と人間科学：日中シンポジウム講演集』平河出版社、1990年、307、314n頁。）

### 3 マナの力

われわれ日本人の文化は、北方系と南方系の民族文化の混合により成立している。それがどれ位の規模で行われたのか、もはや知る術はないが、約1万年前のウルム氷河期の終了以来、日本は地球温暖化による海進現象で大陸と地続きの部分を使い、以後は海を渡航しないと渡れない島になった。この頃からポリネシア文化圏が構成され始める。われわれの祖先の一部である南方系の民族はポリネシア人と同族だと推定されている。ポリネシア人は早くから小さな船で自在に太平洋を渡り歩いていた。そして自分たちの血と言葉と信仰を島々に残していったのだ。かれらの汎神的宗教は日本の神道にも痕跡を残している。

およそ太平洋の半分を覆う巨大な三角形状に分布したポリネシア文化が共通して保持しているのは「マナ」の概念である。これは英国の宣教師コドリントンがメラネシアへの伝道団に加わり、1863年～87年まで研究した成果を、1891年に『メラネシア人—その人類学的・民族学的研究』という書物にまとめたとき使用した用語である。かれは、マナは力そのものであるとともにその現れでもあり、マナという単語は名詞としても形容詞としても動詞としても用いられ、ある人物、物体または儀礼が「マナに充ちた」ものであると同時に「マナをもつ」或いはそれ自身が「マナである」場合があると語っている。<sup>(29)</sup> 残念ながら、コドリントンはタブーとの関連でマナを捕らえており、初期的研究にありがちな誤謬に陥っている。<sup>(30)</sup> このマナの概念は西洋思想界に大きな衝撃を与えた。デユケルムはギリシア神殿の犠牲について「人はそのマナ、その速さ、その力、その大いなる耐久力を得ようがために聖獣を食べたのである。」と言及した。<sup>(31)</sup>

そもそも最初の人間「マヌ」の神話に始まり、Mで始まる短音節の単語は、世界中に分布した神秘的な力を意味する言葉である。インドの「マーヤー」は、ヴィシュヌの夢で構成されるこの宇宙を支える「幻力」を示す。『旧約聖書』には、出エジプトの放浪する民に与えられた天の甘露を「マナ」と呼んでいる。(聖書考古学では、「マナの樹」と呼ばれる花の蜜だとされている。) また、北米インディアンの「マニトゥ」、そして呪的存在の名前を忌避するとき日本語で使われる「もの」など枚挙に暇がない。つまり、英語の本が出るまでもなくマナは普遍的概念として存在したのだ。

ポリネシア人は戦争の勝ち負けも、作物の豊作も、狩猟の獲物も関係する神、人間、動物などのマナの多寡により大きく左右されると考えていた。マナは流動的な神秘的生命力であり、すべての生命や岩などの自然物、或いは人間の言葉にも宿る。人間の靈魂や神的存在はマナの集合体そのものと考えられている。

ポリネシア諸民族の神話伝承について研究が進み、資料が豊富なのはハワイの神話伝承である。そもそもハワイ人は固有の文字を持たず、神話、歴史、哲学の伝承は「口承」により行われた。主として宮廷の師弟が詠唱師(haku mele)の訓練を受けた。ハクメレは様式化された詠唱を記憶し、編纂していく。<sup>(32)</sup> そして、ハクメレが頭教的知識を伝承するならば、秘教知識を伝承するカフナがいた。かれらの伝承によると、<sup>(33)</sup> 人間の靈魂アウアウと神の靈アウアウは同質であり、その違いは単にマナの量が圧倒的に違うだけである。これは人間同士でも同じことで、勇敢な戦士は普通人よりも

(29) ダニエル・ローレンス・オキーフ『盗まれた稲妻—呪術の社会学』上、法政大学出版局、1997年、301-303頁。

(30) 小田亮「マナ・贈与・交通」『DOLMEN』5号、特集：マナ、1991年、4-10頁。

(31) ギルバート・マレー『ギリシア宗教発展の五段階』岩波書店、1971年(改訂版)、41頁。

(32) マイケル・キオニ・ダドリー『古代ハワイ人の世界観：人と神々と自然の共生する世界』たちばな出版、2004年、7-10頁。

(33) 靈的な伝承をもつカフナは、自分たちの流派に名前をつけなかった。「フナ」という技術を命名したのは研究家マックス・フリーダム・ロングである(シャーロット・バーニー『フナ：古代ハワイの神秘の教え』ダイヤモンド社、2005年、13-14頁。)

優れたマナを持っている。カフナを除けば最大のマナを保有するのは王族である。さらに、『モーレロ・ハワイ』によると樹木、鮫、人間などの魂も神の靈魂との差異はない。低次の生命体はその形態や住環境により、発揮できる力が限定されており、高次の生命体は知識と空間を拡大することで力をより大きく発揮できる。ハワイに創造神話らしいものはない。ハワイ語で祖霊神のことをアウマクアと呼ぶが、恐るべき火山の女神ペレや八つの目をもつ巨猪カマプアなどは別として、かれらの神は強いマナを集めて死んだ人間の靈魂が変化したものである。

事実、今でも死者の骨は強力なマナの蓄積器であると考えられている。

「かれの骨は運ばれ、マナによりて神となった。」  
(E lawe ia kona mau iwi a hoomana ia ia i akua) <sup>(34)</sup>



筆者もオアフ島北部にある神殿跡に入ったことがあるが、数百年を経て、観光地化した遺跡でさえ風化した石の底にマナのもたらし場が残っていた。その骨に残る死霊は、供物の形で適度なマナを与えておけば、いわゆる靈的知覚力で番兵の役割を果たすことさえできる。これを体系化したのが、黒魔術師の用いる「死の祈り」である。<sup>(35)</sup> カフナ・アナアナの存在が強調されたため、一時はカフナは黒魔術師であるとの風評が立ち、キリスト教宣教師の格好の宣伝材料にされたことがあった。<sup>(36)</sup>

筆者の米国の某友人は、カフナのエーテル魔術体系は世界最高レベルにあると推薦していた。

しかし、未熟な魔術師が実践するのは、お薦めできない。死霊妖術の深みにはまった魔術団体「セトの寺院」などの悪例もある。魔術師としてのアイデンティティーがしっかり確立された後に、実験として行うほか許されることではない。

さて、カフナの体系でも人間の靈魂を幾つかの段階に区分している。

この分野の古典的研究家であるマックス・フリーダム・ロングは『奇跡の背後にある秘密の科学』において、マナの密度（一個人が蓄積できるマナの総量）に着眼して、次の区分を提唱した。かれの研究は真面目なものだが、不幸にして出典、典拠を明記していない。<sup>(37)</sup>

人間の靈魂の三分	自我	対応するマナの状態
アウマクア (祖 靈)	高 我	マナ・ロア (高密度の神的影響力)
ウハネ (高等靈)	個 我	マナ・マナ (呪的影響力をもつマナ)
ウニヒピリ (動物靈)	低 我	マナ (低濃度の、普通のマナ)

「祖霊」としたアウマクア ('aumakua) は、アクア (akua) とともに一般には「神」を意味するが教典の民の言う絶対神ではない。むしろ、「感覚をもった靈」、「靈的意識」又は「認識力のある存在」という翻訳が相応しい。<sup>(38)</sup>

一方、カフナの組織に参入したと主張するサージ・カヒリ・キング博士は、上記のロングの作業仮設に異を唱える。ロングは一般のハワイ人の誤解に推測を加えて説明しており、カフナに聞いた訳ではないとするものだ。<sup>(39)</sup> かれは機能に着目した次の区分を提唱している。<sup>(40)</sup> キング博士

(34) ダドリー、前掲書、75頁。

(35) Max Freedom Long, *The Secret Science Behind Miracles*, Mrina Del Rey : DeVorss, 1988, p.402.

(36) サージ・カヒリ・キング 『アーバン・シャーマン』 VOICE, 1995年、18-20頁。

(37) Long, op. cit., pp.62, 82, 96-98, 101.

(38) ダドリー、前掲書、33-39頁。

(39) サージ・カヒリ・キング 『ハワイアン・ヒーリング』 国書刊行会、1998年、218-220頁。

(40) キング、前掲書、33-53頁。

は、さまざまなオカルト体系を学習しており、これも出典を明記していないので伝統的区分であるかどうかは些か怪しいが、上記体系とそれほど矛盾するものではない。

人間の霊魂の三分	自我
カネ（霊：神霊的源泉）	高我
ロノ（精神：意志決定者）	個我
ク（心臓：肉体の記憶）	低我

クの基本となる機能は記憶である。人間は記憶力がなければ、思考も活動もできない。社会生活を維持するどころか、生命を維持することも不可能であろう。キング博士は、記憶は体内に震動または運動のパターンとして蓄積されると主張している。それは個人の記憶に留まらず、祖先の記憶、種族の記憶も含んでいる。

ロノの主体は、通常人間が自分自身だと思いついて描いている意識である。その機能は意志決定にある。ロノが最も頻繁に行う意志決定は、注意力をどこに向けるかということだ。ロノはどれが重要で、どれが不要であるかを連続的に判断していく。そして注意力はそれに従って、人間の外部と内部を彷徨うのである。

カネは直観や、啓示の源である。ロングの言うアウマクアと同じく、祖霊に由来する無限の過去に伸びる螺旋状の生命力の紐で形成されている。日常生活では、クの記憶パターンに基づいてロノが好悪、善悪を判定する引き金になる。そして、それは高次の自己であるがために、通常は存在すら意識されない。アレイスター・クロウリーの表現をとれば、H∴G∴A∴、つまり「聖守護天使」であり、黄金の夜明け流に言えば「高次天才」となる。

マナは、食事を取ることや、会話すること、肉体的・性的接触によっても伝染する。強いマナは比較的弱いマナをもつ人間やモノに磁化作用を働く。従って、生まれつき血統によって保有する以上に、マナを高めようと思ったら、強いマナ（キナ）を収集しなければならない。最も簡単なのは王族や勇敢な戦士の使用した装身具などを身の周りにつけることだろう。呪的な感染がマナを増大させる。この方法が極端になると死者の骨を集める妖術師に墮落する。

インドのプラーナや、中国の気と同じ方法でマナを収集し、蓄積することができる。マナは精神作用によっても作り出せる。カフナは観想により心を「波動<sup>ナ</sup>て」、マナを凝集する。また、自然界や人間を注視し、そのマナを変身を通じて採取することもできる。

しかし、普通の方法でもマナは蓄積される。万物にマナはあるのだから、呼吸する空気、飲む水、食物からマナを摂取できる。つまり、空気の良い場所で深呼吸をし、流れる水（清涼な地下水も流れる水である。）を飲み、新鮮な食物を取ることでマナは自然に低我を通して蓄積される。<sup>(41)</sup> もちろん、車の排気ガスに満ちた東京の空気に触れると逆に呼吸が浅くなるし、浄水器を通さないと飲めない水や、ジャンク・フードにどれほどのマナがあるか期待できない。

正しいマナの蓄積は、正しいライフスタイルの実践でもある。海や湖の畔をハイキングして、新鮮な空気と水、そして植物の発するマナを分けてもらう。マナが増す音楽を聴く、チャントをする。瞑想を行う。ネガティブな考えを捨てて、ポジティブな思いを心がける。

今日のカフナが実践しているのは、この種の穏健な方法である。

バーニーが整理した法則は次のとおり。<sup>(42)</sup>

① マナは生命力であり、神秘的で霊的な力、エネルギーである。

(41) バーニー、前掲書、58頁。

(42) バーニーの用語を一部置換したが、出典はロングであり、同じ意味である。基本自我→低我、中間自我→個我、高次自我→高我（バーニー、前掲書、64頁。）。

- ② マナはふつうの生活の中で個我によって取り入れられ、身体を動かしたり、ものを考えるためにつかわれる。
- ③ 残ったマナは、望みや目標を達成するために低我から高我に送られる。
- ④ 自分の意志でマナを取り入れることができ、どのような望みであろうと、それをかなえるために使うことができる。
- ⑤ ネガティブなものごとや考えは、心身のストレスとともにマナを減らしてしまう可能性があり、よくない思いこみはマナの流れをさまたげる。
- ⑥ マナをつかって望みをかなえるには、十分なマナを取り入れ、マナを無駄にしないようにし、三つの自我のあいだをマナが自由に流れるように、ブロックとなるものを取り除く必要がある。

さて、ハワイ語で「考えること」を意味する単語は「マナ・オ」である。すべからず意識の集中はマナの流れを生む。それは一方的に思考する者の頭から出て行くだけでなく、意識を向けた相手から流れ込むものもある。「祈り」は最も強烈な意識集中であり、祈りによって方向づけられたマナの強い流れは、西欧魔術の用語で「思念体」に相当するものを作り出す。その結果、祈り手の高次の自己（アウカア又はカネ）とその対象である神の間に「影の紐」が伸び、両者を結びつける。祈り手はその結果、「光を所有する者」と呼ばれる。

容易に想像がつくように、訓練されたカフナであれば、対象が神でなくとも「祈り」は効果を発揮する。その結果、かれは自然界と人間界に絶大な力を所有するようになる。

白人たちが、ハワイに到着したとき、巨大な帆船や異様に白い肌を見た現地のカフナは、かれらが高度な白い魔法を携えて来たかと早合点した。しかし、かれらは直ぐに自分たちの誤りに気づいた。西洋文明は心の理解については、カフナに遠く及ばなかったのだ。

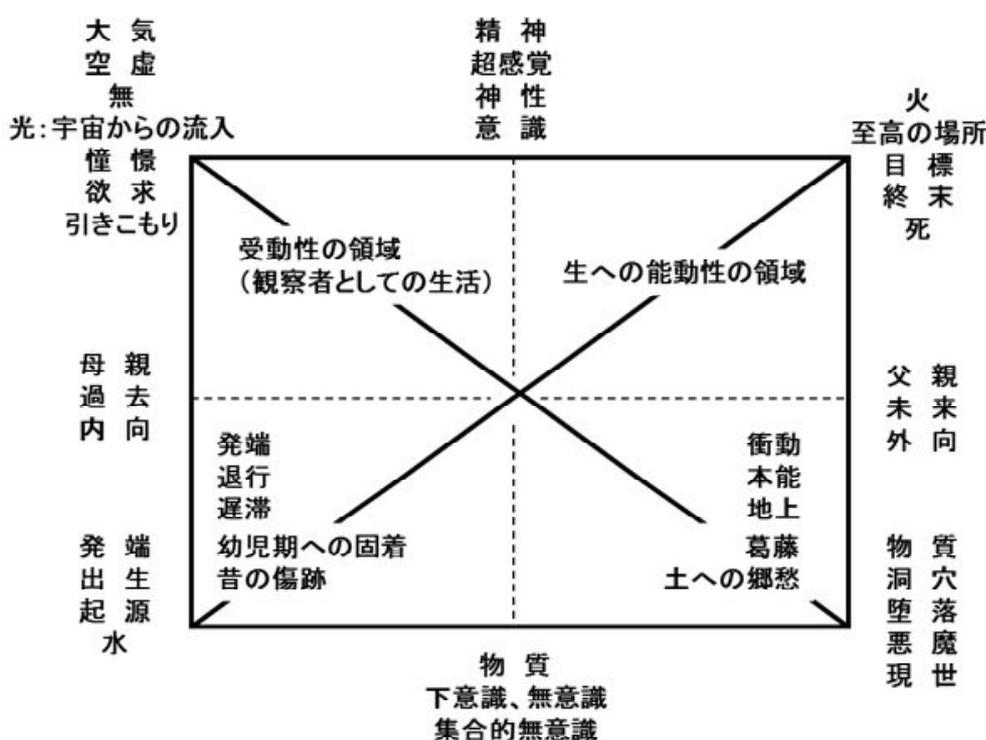
J・S・エマーソンは『ハワイの小さな神』において、「神はカフナを創らないが、カフナはしばしば神を創る。」と述べている。そのカフナの伝承は今も存在する。

## 4 人体の中核

### (1) 人体のかたより

人間の空間認識が人体の構造に支配されていることは先述した。そして、外界を表現するかたちとして、人体をデフォルメした十字形が選択される。その縦横の座標が展開すると長方形のキャンバスが生まれる。われわれの空間認識を収める枠として、約8割の者がこの長方形の枠のなかに内容の一致した意味を付与している。<sup>(43)</sup>

心理検査の分野では「絵画療法」や「箱庭療法」において、クライアントが作成した絵や箱庭の図形的空間配置を解く手がかりとして、グリュンワルト (grunwald) の空間図式を用いることが多い。空間図式は、「自己・他者・世界の認知特性、幼児期の親子関係、無意識的な心理内容、現在の感情や気分の反映」などを象徴するものと考えられ、用紙や箱庭のどの部分に絵が描かれているか、どこが強調されているかに注目する。



上図が「グリュンワルトの空間図式」の一例である。空間の象徴性をおおまかに、右は外向性、左が内向性を示し、下は物質、上が精神を現しているという意味づけている。

従って、左側はその人の内的世界、無意識界を、右側は外的世界、意識界を示す場合が多い。また、右が外的世界、左が内的世界とすると、箱の手前、見とり図を描いた場合には下の方は身体的で、向こう側、つまり上の方は精神的な世界と考えられる。

さらに右は未来、左は過去である等のさまざまなかたよりが生まれる。<sup>(44)</sup>

この空間表象における左右の問題は、クライアントの右利き、左利きの問題とは相関がないと考えられている。

小西啓史は、東京都内の地下道の歩行者は左側通行になりやすいことを発見した。3～4メートル幅の地下道において、最も人の流れの多いのは進行方向に対して左側の壁から1メートル

(43) イングリット・リーデル『絵画と象徴』青土社、1996年、39頁。

(44) 吉村浩一『逆さめがねの左右学』ナカニシヤ出版、2002年、72-73頁。

ル前後である。<sup>(45)</sup>

また、画家が肖像画を描いたとき左向きに描くか、右向きに描くかを調査した結果は、次のように極端なものとなる。<sup>(46)</sup>

	左向きの肖像画	右向きの肖像画
自画像	39.4%	60.6%
男性像	56.2%	43.8%
女性像	67.7%	32.3%

ところで、人間の手足のように左右の区別があり、鏡に映した像と重ねあわせることができないものを「キラル(chiral)」、人間の身体全体のように鏡像体と実物を区別できないものを「アキラル(achiral)」という。

いきなり鏡像反転感覚を持ち出したので困惑した読者もいるだろうが、人間が鏡を見たとき「何故、上下反転像ではなく、左右反転像として認識するか？」は、物理的な問題ではなく心理的な問題であり、人間が座標を確定する場合は、まず上下、次に前後、そして最後に左右を定めるためである。<sup>(47)</sup> それを基本的な理解基盤として、次に進もう。

キラルな対象は、実物と鏡像とは「対掌体(enantiomorph)」である。つまり、前出の直交3軸のいずれか2軸をあわせると、残る1軸上で反転(inversion)する。そのため手足のようにキラルな対象は、人間が座標軸決定の優位性をもち、常に左右軸を最後にするため、左右対称となる。<sup>(48)</sup>

そして、対のものには優劣の区分が生まれる。

日本語では、戦国時代の騎馬武者の作法から右手を馬手<sup>めて</sup>、左手を弓手<sup>ゆんで</sup>と言う。これも右利きが優位であったためである。(「馬手に血刀、弓手に手綱、・・・」民謡『田原坂』より。)

ニュージーランドのマオリ族は、右手は男性的で能動的、左手は女性的で受動的と考えており、右は生、左は死の象徴である。季節とコリオリ力の反転する南半球でも、左右は同じ感覚である。

殆どの分化において、右が高いところ、上の世界、天空を現すのに対して、左は下の世界、大地を表している。右は本質的に聖なる力、あらゆる合法的な善なるものの源泉を示している。それに対して、左は右の反対であって、神聖を汚すもの、不潔なもの、あいまいなもの、弱々しいもの、つまり恐ろしい悪いものを示す。<sup>(49)</sup>

(45) 小西啓史「歩行時における行動特性に関する研究：歩行行動の非対称性についての検討」『日本応用心理学研究 第8号』日本応用心理学会、1983年、25-33頁。

(46) 鈴木武「街と都市の空間配置—左右の位置の意味—」『経営志林』第36巻第3号、1999年  
<http://www.i.hosei.ac.jp/~tsuzuki/teacher/space-dist/space-dist.html>

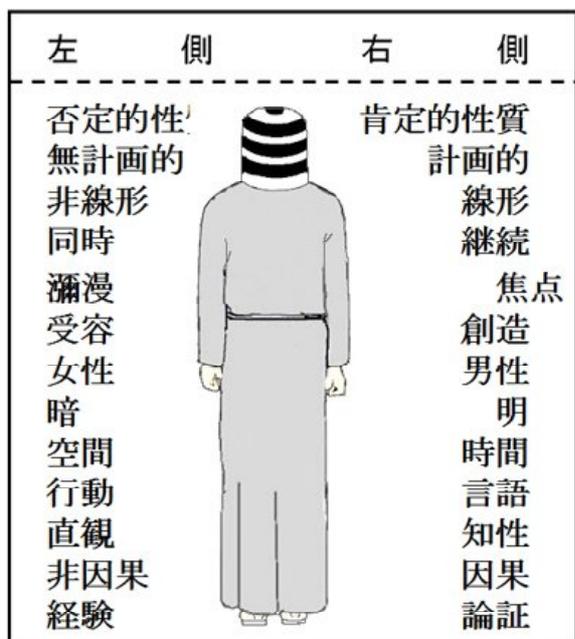
(47) 吉村浩一『鏡の中の左利き』ナカニシヤ出版、2004年、22-23頁。

(48) 吉村浩一、『逆さめがねの左右学』、116-126頁。

(49) トゥアン、前掲書、67-68頁。

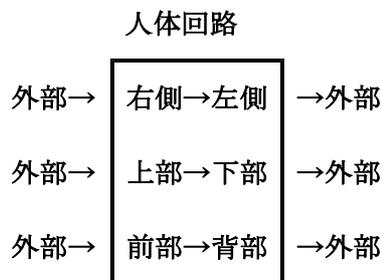
## (2) セフィロトの対応

人体のオカルト的な分析を行うにあたり、西洋は解剖学を、東洋は経験則による経絡図を発展させた。これらの方法はともに一長一短あり、人体の機械的構造は解剖した方が理解しやすく、心身相関については経絡の反応を見た方がより深く理解できる。西洋においては、この不可視の人体回路に流れる力流を「オド」と読んだ。「オド」は、カール・フォン・ライヘンバッハ男爵の提唱した磁気的生命力である。



一般論として、人体において左図のような対応が成り立つ（誤解のないように、右側が優位、左側が劣位という思想はない）。オドとは人間の思惟により、生命力の強弱により、自由に流れる磁気力であるが、その根元はプラーナと同様に、人体（小宇宙）の外部、大宇宙から到来する。その源は太陽であり、月である。

生体磁気の強弱、あるいは流れる方向は、一般に下図のとおりである。



人体を流れる力流の感じ方は、世界中の数多くの文化で共通である。人類の大多数が右利きで、主たる感覚器官が顔の前面に集中し、しかも、人体の最上部にあることを勘案すれば無理ないことかもしれない。

ヘブル語の יָד (ヤド) は、「手」を意味するだけでなく、「神の手」という意味だが、のちに転嫁して יָמִין (ヤミン) 「正しき手」となり、 יָמִין יְכוּן (ベンヤミン) 「正しき手の息子」としてイスラエルの1氏族を表す名前となった。この言葉 יָמִין は「南」と同時に「右」を意味する。古代ヘブル語の方位を示す言葉は、2重の意味をもち、東を正面とした人体に対応している。すなわち、次のとおりである。



ちなみにこの呼称は現代では使われていない。東西南北は、四大武器に描かれるようにミツ

ラク、マーラヴ、ダローム、ツァフォンと呼ばれている。

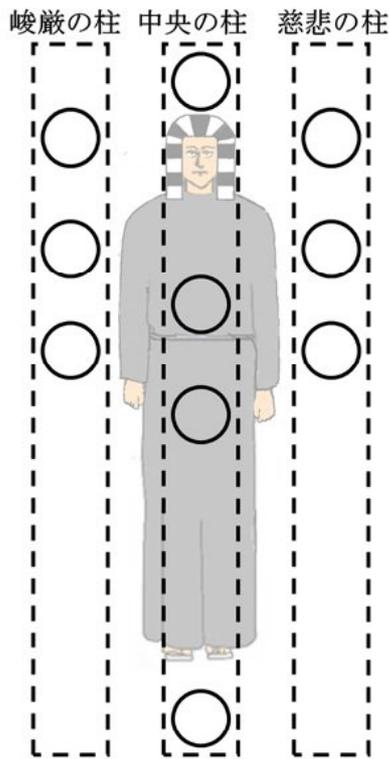
しかし、当然ながら例外もある。例えば、元来左利きだった子供を無理に右利きに矯正した場合は、脳内の運動中枢の配線が入れ替わっている可能性がある。左利きの人口は、男性の11%、女性の9%と言われるが、かれらは左手が能動的で右手が受動的だと感じるのだろうか。多くの場合、答えは否定的である。

右利き、左利きの分布は絶対的な規範ではないし、ましてオカルト解剖学を述べるものではない。

人体の回路において真に重要なのは、左右、前後の境界線、すなわち中心線だからだ。

脊椎動物の身体は、消化器系、循環器系、神経系の三大生命システムともに、主要な内臓が人体の中央部を上下に走っている。それを考えると、金属の束を巻き込み何重にも布やビニール、ゴムなどで被覆された電線というイメージに近い。

ここで、第四章で学んだ人体と宇宙の対応を再び思い出してもらいたい。



「宇宙を映す魔法鏡」には、10のセフィロトが対応し、人体はそのなかにある。つまり、人体の中心線には「中央の柱」に配列されたセフィロトがたち、右には「峻厳の柱」に配列されたセフィロトが、左には「慈悲の柱」に配列されたセフィロトがたつのである。<sup>(50)</sup>

これはユダヤ神秘主義の伝統的な表現であるシウル・コーマーにおけるアダム・カドモン<sup>(50)</sup>の身体図のセフィロト配置とは、左右対称の逆配置となる。

ヘルメス学において、左図のようなセフィロト配置となる理由は人間の肉体が「小さな顔」の投影だからだ。

ユダヤ教では人間の身体にセフィロトを配置することはしなかった。神、アダム・カドモンの像にセフィロトを重ね併せている。

われわれ人間が神を仰ぐとき、神の像、すなわち「大きな顔」<sup>(50)</sup>は、黄金の夜明けの図像でも横向きの顔（背面を示す象徴図）で示されている。『旧約聖書』にあるように、預言者モーシェでさえ、神の顔を直視するのを恐れて顔を隠したのである（『出エジプト記』3章7）。

しかし、「小さな顔」<sup>(50)</sup>の図像は正面を向いている。それは「大きな顔」と「小さな顔」が丁度、鏡像のように対置されるからだ。

人間はミクロプロソポスの写し絵であり、アダム・カドモン、マクロプロソポスがセフィロトの正位置を示すとすれば、ミクロプロソポス、人間はセフィロトの逆位置となるのである。

従って、カバラ十字を切るときは、右肩がゲブラーで、左肩がゲドゥラーとなる。

さて、東洋の伝統では七つのチャクラを人体の中央線に置く。

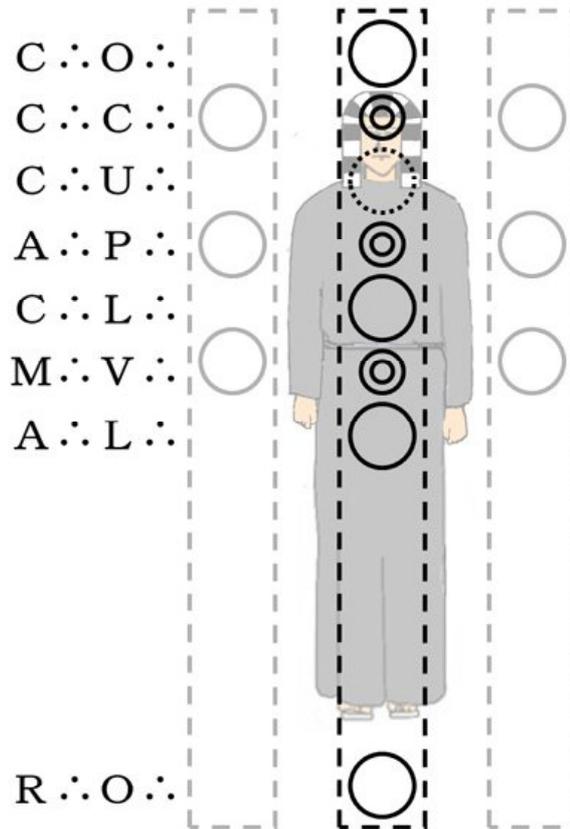
これらに対応するセフィロト及びセフィロト結合は、以下のとおりである。

- |   |           |                         |          |
|---|-----------|-------------------------|----------|
| 1 | サハスラーラ    | 日輪の王冠 (CORONA ORBIS)    | ケテル      |
| 2 | アージナ      | 虚空の天蓋 (CEREBRUM CAELUM) | ビナー＝コクマー |
| 3 | ヴィシュダ     | 影の代弁人 (COGNITOR UMBRA)  | ダース      |
| 4 | アナーハータ    | 棕櫚の木 (ARBOR PALMARUM)   | ゲブラー＝ケセド |
| 5 | スヴァヒストハーナ | 獅子の心臓 (COR LEONIS)      | ティファレト   |

(50) Gershom Scholem, *Kabbalah*, New York : A Meridian Book, 1974, p.109.

6 マニプーラ	大いなる言葉 (MAGNA VERBORUM)	ホド=ネツアク
7 ムーラダーラ	月の秘密 (ARCANA LUNAE)	イエソド
8 なし	万象の支配者 (REGNATOR OMNIUM)	マルクト

通常、1-3-5-7-8の五つのセフィロト（ダースは偽セフィロト）をもって、中央の柱と言うが、峻厳の柱と慈悲の柱のセフィロトが結合した2-4-6の三つの重セフィロトを加えると人体のオカルト的図像が浮き堀りになる。



## 実践講座

注：今月の作業は量が多く通常の1ヶ月の枠内に収まらないかもしれない。

その場合は、途中で切るのではなく、すべての作業終了後に記録を完了すること。

ニオフィイト昇任課題は、第1章から第12章までの課題を完了し、その全記録を送付した者のなかから選択して郵送される。(必ずしも全員に入団の誘いがこないことは承知して頂きたい。)

### 5 自分の場所

ニオフィイトの修行の初期において、肉体と精神の双方を弛緩させる方法を学んだ。それは単なる導入の技術ではなく。あなたが日常生活を営む上でも、貴重な生命エネルギーを浪費しないようにリラックスを心がけていかななくてはならない。

ここでは、より深いリラクゼーションの状態に達する方法と、その後に獲得すべきあなた自身の特別な場所について述べる。この作業は今月の最初の1週間に毎日連続して行うこと。一週間たっても顕著な結果が得られない場合は、もう一周間延長する。首尾良く特別な場所を設定できるか、あるいは2週間以上の連続的な試みを終わるまでは、第6項以後の作業に入ってはいけない。

まず、20～30分間邪魔されないよう手配してから、きつい洋服やベルトをゆるめ、快適な姿勢をとってリラクゼーションの態勢に入る。個人差もあるが、ゆったりとした大きなソファーなどが最適である。とにかく自分にあった姿勢で肉体を楽にする。

目を閉じて、深い呼吸をする。ゆっくりと吸い込み、吐くときに肉体の疲労や緊張が呼吸とともに排出されていくように感じる。(四拍呼吸の必要はない。)

次に標準的な手順でリラックスを確かめて行く。

いつもより、ゆっくりと、肉体のそれぞれの部位を確認しながら進めていく。指の一本、一本、太股の筋肉の一筋一筋、内蔵の各器官に至るまで、その形状や色合いを強く視角化しながらリラックスさせていく。

完全にリラックスし、肉体の緊張がほぐれたら、神社や寺によくあるような自然石の階段を想像する。その階段は全部で十段あり、一段一段の形も高さも異なっている。その階段の様子を細部に至るまで想像し、視角化しなさい。

あなたは階段の上に立っており、その階段をゆっくりと降り始める。

一段おりるごとに、リラクゼーションが深くなっていく。

十段目に足をかける。不揃いな固い石段が、あなたのサンダル履きの足裏を強く押す。身体の無用な力が抜けていく。

九段目を踏む。気持ちよい柔らかな皮膚感覚が全身を包み込む。

八段目に進む。腕や脚のなかの筋肉がほぐれていく。

七段目に降りる。内蔵のひとつひとつが内側から輝き始める。

六段目に進む。さらに深いリラクックス状態になり、心地よい開放感が肉体を包む。

五段目を探る。心労や心配が溶けていく。

四段目に進む。深いリラクゼーションは、羊水のなかを泳ぐ嬰兒のような。

三段目に着地する。周囲の様子が屈折して見えるようになる。

二段目に進む。重い水中を遊泳するように肉体がわずかに遅れて動く。

一段目に触れる。ゆったりとリラクックスし、肉体も精神も完全に自由だ。

あなたは階段の下の地面に羽毛のように降り立つ。

次にとても平和で美しい場所を想像する。あなたの降りてきた場所は、その特別な場所へと繋がっている。それが山の頂きなのか、森の野原なのか、遺跡の中庭なのか、単にふわふわした雲の上なのかは、個々の心のあり方によって異なる。しかし、誰も個人的な楽園は持っているもので、その外観や位置こそ異なっても、この平和で美しい特別の場所に到達することができる。

あなたが特別な場所の視角化を終えたら、それが自分にとって、特別な場所であることを宣言する。そして、周囲を見渡し、こと細かに観察する。何が見えるか。何が聞こえるか。臭いや香りはするのだろうか。その場所にいると、どんな気分になるのだろうか。美しいのはどこか。その美しさは、女性的でやさしい風景なのか、男性的で壮絶な美なのか。

そして、次にこの特別の場所をあちこち動き回り、最も居心地の良い地点を探す。それが分かったら、そこをあなたの座であると宣言する。座に座ってリラクゼーションを進める。しばらく時間をとり、深く平和な気分に入る。あなたが良いと思うだけ、そのなかに座っていなさい。

ここはあなた専用の休息所である。ここにいると疲れが癒され、活力が増大する。

十分な休息を取ったと感じたら、再び階段のところに赴く。

十段の石段を見上げて、それを上りながら徐々に目覚めていく。

一段目を踏む。皮膚の奥からぴりぴりとした目覚めの予感が走る。

二段目に進む。リフレッシュされた頭のなかに光が射し始める。

三段目に登る。重い弛緩状態から浮上していく様子が感じられる。

四段目に進む。周囲が明るくなり始める。

五段目に足をかける。特別な場所で得た平和と美の感覚をそのまま抱きながら、徐々に眠りに似た状態から醒めていく。

六段目に進む。すっかり目が覚めてきた。

七段目に触れる。全身に力が漲り、気分が良い。

八段目に進む。瞼の裏が熱くなり、目を開きたい。

九段目にあがる。呼吸が早くなる。

十段目に到達した。あなたは目を開け、おおきな背伸びをして、微笑む。

実際の肉体に戻り、ゆっくりと立ち上がって下さい。

## 6 エーテル的呼吸の操作

### (1) 呼吸によるマナの蓄積

第3章で呼吸について学んだが、ここでは最初にマナを蓄積する方法を紹介する。  
シャーロット・バーニーは、かれの流儀による「マナの呼吸」を次のように説明する。<sup>(51)</sup>

「沈黙を始め、感受性をとぎすまし、夢うつつの状態に入ります。前で両手を組み、四回ワンセットのマナの呼吸をします。ゆっくりと深呼吸し、四回息を吸いこみ、四回めで呼吸をとめ、すばめた口からゆっくりと息を吐き出します。高我や、案内者、天使や守護者たちに見守ってくれるようなのみます。低我には呼吸の儀式のためにマナを集めるようなのむのです。泉の水のようにマナが自分の体内からわき出るのを思い浮かべます。もっとマナが必要だと感じたら、十分な量のマナが集まるまで四回ワンセットの呼吸を続けます。」

この呼吸法は、四回連続して呼吸し、

さらに、バーニーは呼吸（ハ）の儀式を続ける。

「マナに満たされたと感じたら、祈りを口に出してとなえます。  
祈りをかなえるために、低我から高我にマナが送られるよう願います。マナが上昇していくのを思い浮かべましょう。手のひらを上に向けて両手を膝の上に置きます。祈りをあと三回、合計で四回となえ、マナが流れるのを感じ、思い浮かべます。祈りがなかったところを想像しましょう。  
十分なマナが送られたと感じたら両手を組み、こすりあわせて流れをとめます。次のようにいいましょう。  
<祈りは流れている。そうなりますように。準備はととのいました。>  
最後に高我と低我に感謝して終わります。」

### (2) 光の呼吸法（活力体の純化）

本技法は、フランツ・バードンの魔術技法を参考に再構成している。

#### a 皮膚呼吸による光の導入

人間は肺呼吸だけではなく、皮膚呼吸もしている。もちろん、進化した肺呼吸システムをもつ哺乳類は、両生類とは違い呼吸全体の1%程度しか皮膚呼吸をしていない。しかし、この1%を行うのは、あなたの全身を覆う皮膚であることに思いを馳せてもらいたい。

リラックスできるようにソファか椅子の上に座る。ゆっくりと息を吸う。そのとき、喉から肺に流れ込む外気と同時に、全身の毛穴から宇宙の生命力が流れ込み、体内に蓄積される様子を強くイメージし、確信しなさい。

乾いたスポンジが水を吸うように、食欲にエネルギーを吸い込む様子を感じなさい。あなたの身体を包むエーテル界から無数の光の粒子が、あなたの内部に入り込む様子を視覚化しなさい。身体のなかで光が渦を巻いて、あなたの内部の不純なものを消し去っていきます。そして、息を吐くとき、肺から喉を押して内気が吐き出されると同時に、全身の皮膚から光の粒子とともに、体内の不純物が分解され排出されるのを感じなさい。

皮膚呼吸により、光の活性力を蓄積するときの感覚は、きわめて個人差が大きく、どのよ

---

(51) バーニー、前掲書、144-145頁。

うに感じたら正しい方法であるかは教示できない。ひとつの例としては、目を閉じて全身を乱舞する光の粒子を視覚化してみることだ。わたしの場合は、肺を中心とした胴体の中心部に光の渦を、その他の四肢や、末端にいたるにつれ希薄になる微粒子の群れが、暗い体内の内臓や、骨や、筋肉のなかを乱舞し、内側から照らしている。その粒子が呼吸とともに増減し、ひととき強い輝きが喉と肺を通り、小さな流れが全身の何万という毛穴から出入している様子が見える。しかし、あなたが自分なりの方法で、光が外部から全身の皮膚を透過して内部に蓄積されていると感じたら成功です。

## b 活力の蓄積

光の導入と排出に馴れたら、次のステップに進みます。

光を呼吸するときと同様に全身から光の粒子を吸い込みますが、今度は息を吐くときは不純物のみを吐き出し、光を体内にとどめておきます。一呼吸するたびに、体内の光の圧力が高まっていきます。蒸気圧が高まるように、内臓や、骨や、筋肉のなかで光の微粒子がざわめき、躍動する様子を感じてみよう。十分に光の圧力が高まれば、あなたはその光を意志の力で放射できるようになるだろう。

活力を蓄積する体内感覚を把握し、十分なだけ光を溜め込んだら、ゆっくりと呼気により放出する。光が全身から放出され、内圧が平常に戻るのを確認しなさい。

## 7 神殿の封印

### (1) 全体像

第6章で詳細に説明した個人神殿に生命を与えるために「封印」と呼ばれる儀式を行う必要がある。「封印」には三つの段階があり、最後に二度目の「聖別」を実施する。それぞれに各一週間を要するので、都合2～3週間をこれに当てる。もちろん、前提として基本的な浄化と聖別が終了していなければならない。

第1の封印：四大天使、四人の王、四大の小角による封印
第2の封印：四セフィロトの小角、四聖獣による封印
第3の封印：四天使団及び光の封印
聖別：四方位の聖別

具体的な方法については、次に説明するが、儀式の枠組みは同じである。

#### ◎ 準備

室内を整頓し、時間があれば掃除をする。その後、祭壇等を揃えて神殿を設定する。最低でも四方旗は必ず準備する。外的環境が整ったら、神殿のなかに静かに座って瞑想する。

#### ◎ LBRP

#### ◎ 封印または聖別

A～Dの要領で行う。

#### ◎ LBRP

### (2) 第1の封印

この儀式を4日間繰り返して実施する。(分割してはいけない。完全な儀式を4日で合計4回行うという意味である。)

東に面する。目を閉じて次のイメージを思い浮かべる。肉体の動きは、実際に行うこと。目を開いても視覚化できるようであれば、自由に行って良い。

神殿の壁が溶け込み、東の門が出現する。門は重厚な鉄張りの城門でも、軽いチーク材の扉でも、光の門でも良い。あなたの好みの形で構築する。

その門が開き、門の彼方に風の吹きすさぶ野原が現れる。濃厚な野花の香が神殿の内部に溢れる。紫色に近い鮮明な上空から、黄色の法衣を纏った大天使ラファエルが出現する。

あなたは、ラファエルに向い嘆願する。

「神の癒し手たるラファエルよ。風の支配者よ。われらの神聖なる場所を、城塞のごとく安全に保つため、この東の門扉を封印し給へ。」

ラファエルは右手の短剣で空中に神秘的な紋章を描く。

「わが感謝を捧げる。東に平安あれ、汝は常に歓迎されん。」

ラファエルが門の背後の空間の彼方に去っていく。

次に、風の王パラルダに嘆願する。

「汝、雲を駆り、風の翼の群を導く者よ。汝、不滅の栄光の王パラルダよ。

わが声を聞け、この東の方角を守護せんため、風の門扉を封印し給へ。」

パラルダは旋風とともに出現する。そして、懐中に納めた粉末の香料を取り出し、門の上下左右に振り撒く。強い刺激的な芳香が一瞬たちこめる。

「わが感謝を捧げる。風の族に平安あれ。汝は常に歓迎されん。」

パラルダは再び旋風とともに去った。

あなたは風の魔法武器、短剣を持ち東一風の門の前に立ち、大きな薔薇十字を切り、その軌跡を黄色で視覚化する。

短剣を胸の前で両手で捧げ持ち言う。  
「われ東の方角を守護せんがため、風の小角を召喚せり。」  
短剣で前上方を指し、「風の風よ」  
短剣を垂直に切り下ろし、前下方を指し、「風の水よ」  
短剣を前左側を指し、「風の地よ」  
短剣を水平に切り、前右側を指し、「風の火よ」  
短剣を門の中心に当て、右廻りで円を描く。  
「風の小角により、東に守護の盾が形造られた。  
邪悪なるものどもは許可なくして、この門を通過し得ず。」  
東の封印終了。

続いて南に面する。  
神殿の壁が溶け込み、南の門が出現し、門が開き、門の彼方に熱砂の照り返す砂漠が現れる。熱気とともに金属の焼けた臭いが神殿の内部に溢れる。陽炎のたつ砂の上から武装して赤いマントを纏った大天使ミカエルが出現する。  
あなたは、ミカエルに向い嘆願する。  
「神の剣たるミカエルよ。火の支配者よ。われらの神聖なる場所を、城塞のごとく安全に保つため、この南の門扉を封印し給へ。」  
ミカエルは右手の棒で空中に神秘的な紋章を描く。  
「わが感謝を捧げる。南に平安あれ、汝は常に歓迎されん。」  
ミカエルが門の背後の空間の彼方に去っていく。  
次に、火の王ジーンに嘆願する。  
「汝、火輪を駆り、紅蓮の炎を導く者よ。汝、星光の王パラルダよ。  
わが声を聞け、この南の方角を守護せんがため、火の門扉を封印し給へ。」  
ジーンは火花を全身から散らしながら出現する。そして、右手に握る稲妻で、門の上下左右を突き刺す。青白い閃光が四度目を灼き、皮膚の上にびりびりと緊張が走る。  
「わが感謝を捧げる。火の族に平安あれ。汝は常に歓迎されん。」  
ジーンは、火花を散らしつつ去った。  
あなたは火の魔法武器、棒を持ち南一火の門の前に立ち、大きな薔薇十字を切り、その軌跡を赤色で視覚化する。  
棒を胸の前で両手で捧げ持ち言う。  
「われ南の方角を守護せんがため、火の小角を召喚せり。」  
棒で前上方を指し、「火の火よ」  
棒を垂直に切り下ろし、前下方を指し、「火の地よ」  
棒を前左側を指し、「火の風よ」  
棒を水平に切り、前右側を指し、「火の水よ」  
棒を門の中心に当て、右廻りで円を描く。  
「火の小角により、南に守護の盾が形造られた。  
邪悪なるものどもは許可なくして、この門を通過し得ず。」  
南の封印終了。

続いて西に面する。  
神殿の壁が溶け込み、西の門が出現し、門が開き、門の彼方に茫漠たる大海原が現れる。潮騒とともに湿った海の臭いが神殿の内部に溢れる。海原を渡りながら武装して青いマントを纏った大天使ガブリエルが出現する。  
あなたは、ガブリエルに向い嘆願する。  
「神の力たるガブリエルよ。水の支配者よ。われらの神聖なる場所を、城塞のごとく安全に保つため、この西の門扉を封印し給へ。」  
ガブリエルは両手にもつ杯で空中に神秘的な紋章を描く。  
「わが感謝を捧げる。西に平安あれ、汝は常に歓迎されん。」

ガブリエルが門の背後の空間の彼方に去っていく。  
次に、水の王ニクサに嘆願する。  
「汝、洪水を起し、半透明の生命を導く者よ。汝、海の王ニクサよ。  
わが声を聞け、この西の方角を守護せんため、水の門扉を封印し給へ。」  
ニクサは海原を押し分けて水中から出現する。そして、右手の壺の中身を門の上下左右に降りかけると、海の泡が門を濡らす。  
「わが感謝を捧げる。水の族に平安あれ。汝は常に歓迎されん。」  
ニクサは、水面を割って消えた。  
あなたは水の魔法武器、杯を持ち西一水の門の前に立ち、大きな薔薇十字を切り、その軌跡を青色で視覚化する。  
杯を胸の前で両手で捧げ持ち言う。  
「われ西の方角を守護せんがため、水の小角を召喚せり。」  
杯で前上方を指し、「水の水よ」  
杯を垂直に切り下ろし、前下方を指し、「水の風よ」  
杯を前左側を指し、「水の火よ」  
杯を水平に切り、前右側を指し、「水の地よ」  
杯を門の中心に当て、右廻りで円を描く。  
「水の小角により、西に守護の盾が形造られた。  
邪悪なるものどもは許可なくして、この門を通過し得ず。」  
西の封印終了。

続いて北に面する。  
神殿の壁が溶け込み、北の門が出現し、門が開き、門の彼方に肥沃な大地と深い森そして、遠方の雄大な山脈が見通せる。朝方の森のなかのような爽やかな香りが神殿を満たす。森のなかから、緑のマントを纏った大天使アウリエルが出現する。  
あなたは、アウリエルに向い嘆願する。  
「神の玉座たるアウリエルよ。地の支配者よ。われらの神聖なる場所を、城塞のごとく安全に保つため、この北の門扉を封印し給へ。」  
アウリエルは腰帯につけた円盤を外すと空中に神秘的な紋章を描く。  
「わが感謝を捧げる。北に平安あれ、汝は常に歓迎されん。」  
アウリエルが門の背後の空間の彼方に去っていく。  
次に、地の王ゴープに嘆願する。  
「汝、大地の守護者、鉱脈を導く者よ。汝、不動の自然の王ゴープよ。  
わが声を聞け、この北の方角を守護せんため、地の門扉を封印し給へ。」  
ゴープは地面の割れ目から出現する。そして、右手の巨大な槌を軽々と振るって門の上下左右に打ち込む。強烈な打撃音と震動が門を揺り動かす。  
「わが感謝を捧げる。地の族に平安あれ。汝は常に歓迎されん。」  
ゴープは、大地の割れ目に消えた。  
あなたは地の魔法武器、円盤を持ち、北一地の門の前に立ち、大きな薔薇十字を切り、その軌跡を緑色で視覚化する。  
円盤を胸の前で両手で捧げ持ち言う。  
「われ北の方角を守護せんがため、地の小角を召喚せり。」  
円盤で前上方を指し、「地の地よ」  
円盤を垂直に切り下ろし、前下方を指し、「地の火よ」  
円盤を前左側を指し、「地の水よ」  
円盤を水平に切り、前右側を指し、「地の風よ」  
円盤を門の中心に当て、右廻りで円を描く。  
「地の小角により、北に守護の盾が形造られた。  
邪悪なるものどもは許可なくして、この門を通過し得ず。」  
北の封印終了。

再び、東に面する。

### (3) 第2の封印

第1の封印終了後、3日をおいて、この儀式を4日間実施する。

東に面する。目を閉じて次のイメージを思い浮かべる。

神殿の壁が溶け込み、東の門が出現する。門がどんどん拡大していく。言い換えれば、あなたは門のなかに入っていく。

そこは齢百歳をも越えようかという老人の葬儀の場所であった。嘆き悲しむ親族や友人たちが、老人を板の上に乗せ、白い花を大量にその回りに配している。老人の亡骸は、肉親の男たちに担がれて、遠くの巨木の方に運ばれていく。

それは途方もない樹木であって、山をひとつ背負ったような、森がそのまま一本の幹で支えられたような、巨大な緑のたわわな枝が空を覆い隠すように聳えている。

葬儀の列は巨木の麓に到達した。死者の亡骸が、男たちの手で台から降ろされ、樹木の幹に開いた深い割れ目のなかに落とし込まれる。割れ目の奥は深く、亡骸はすぐに見えなくなった。葬儀の参列者は何かを期待するかのように、暗い上空の枝葉を仰ぎ見る。巨木の真下から見上げると、それは空全体を覆い隠す暗緑色の雲のように映る。

やがて、暗い枝葉のそこかしこに白い点が開き始める。その白い点は次々と数を増すと同時に、その幾つかは地上目指して落ち始めた。会葬者の回りに白い花が舞い始める。それは美しくも幻想的な風景であった。あたかも老人の生命が姿を変えて、花の生命を満たしていったかのような。

風の魔法武器、短剣を手に東の壁に向かい地の追儼の五芒星を描く。

「東の翼ある者よ。いと高き夜明けの太陽の門の守護者よ。あまねく邪悪に対して、東の門を封印し、英知の概念に対して開け。」

南に面する。目を閉じて次のイメージを思い浮かべる。

神殿の壁が溶け込み、南の門が出現する。門がどんどん拡大していく。言い換えれば、あなたは門のなかに入っていく。

そこは巨大な鍛冶場である。機械仕掛けのふいごが、凄まじい音を立てて、炉を煽っている。コークスが真っ赤に燃える炉の基部から、炎を吹きながら溶けた鉄が流れ出ている。屈強な刀鍛冶が、一抱えもある鉄槌を棍棒かなにかのように自由自在に振り回し、真赤に熱された地金を連打している。そのリズムカルな打撃音とともに無数の火花が吹き出していく。単なる溶鉄の固まりだった地金が、徐々に細長く引き延ばされ、白熱状態から鈍い赤色になる頃には、ほとんど刀の外観を呈していた。あなたはその鉄床を覗こうとした瞬間、頬に熱いものを感じて退く。弾けた鉄の熱い破片が頬をかすめたのだ。熱気と灼けた金属の臭いを嗅ぎながら、あなたは南を封印する。

火の魔法武器、棒を手に南の壁に向かい地の追儼の五芒星を描く。

「南の翼ある者よ。いと高き真昼の太陽の門の守護者よ。あまねく邪悪に対して、南の門を封印し、奉仕の概念に対して開け。」

西に面する。目を閉じて次のイメージを思い浮かべる。

神殿の壁が溶け込み、西の門が出現する。門がどんどん拡大していく。言い換えれば、あなたは門のなかに入っていく。

そこには深い森に抱かれた青い湖があった。湖の表面には睡蓮の白い蕾がいくつも浮かんでいる。緑の葉の上の白い花のコントラストは見事なばかりである。その睡蓮の蕾がいっせいに膨らみ始める。夕暮れの薄暗い湖面の上に、白い半透明の睡蓮の花弁が開いていく。濃厚な花の香りが意外な鮮明さで、湿って重い湖面の空気を満たす。

やがて、湖面はさらに暗くなり睡蓮の白い輝きばかりが朧に見えるようになり、水面を薄い

霧が流れると、その輝きさえ消えて、深い森に抱かれた湖のみが、暗黒の面に空の星を微かに映して瞬いていた。

水の魔法武器、杯を手に西の壁に向かい地の追讎の五芒星を描く。

「西の翼ある者よ。いと高き日暮れの太陽の門の守護者よ。あまねく邪悪に対して、西の門を封印し、理解の概念に対して開け。」

北に面する。目を閉じて次のイメージを思い浮かべる。

神殿の壁が溶け込み、北の門が出現する。門がどんどん拡大していく。言い換えれば、あなたは門のなかに入っていく。

そこには深い谷が横たわっていた。あなたは夜の谷底を歩いている。石や岩の散乱する谷底は、乾いた赤土に覆われており、草一本も生えていない無住の地である。

谷の側面は地層が露出して斜めに走っており、その地層のなかに、暗くて定かではないが石化した古代の生き物の骨が見え隠れしていた。谷底の最も深い場所には、化石化した十字架が横たわっていた。腕木の長さが等しい十字架は、丸太を組んだ素朴な者であるが、長い年月を経て石となった表面は、ひび割れ、歪んでおり、果たして古代の人間ならざる知的種族の遺産であるのか、偶然二本の木が重なってできたのかは判別できない。

この十字架の中央部にくぼみがあり、僅かな黒土が盛ってあった。その一握りの土の表面が割れると微速度撮影を早回しで見るように、土のなかから新芽が頭をもたげ、この死の谷で唯一の緑の生命は、枝を伸ばし、みずみずしい葉を広げ、梢を高く掲げていく。見る間に人間の背丈ほどに生育した喬木は、その枝の先端に赤い花とも実ともつかないものを実らせた。そこから甘い香りが漂ってくる。

地の魔法武器、円盤を手に北の壁に向かい地の追讎の五芒星を描く。

「北の翼ある者よ。いと高き真夜中の太陽の門の守護者よ。あまねく邪悪に対して、北の門を封印し、憐憫の概念に対して開け。」

東に面して終了する。

#### (4) 第3の封印

第2の封印終了後、3日をおいて、この儀式を4回実施する。

祭壇上で蠟燭を灯す。(蠟燭は持ち運べるように台にいれておく。)

蠟燭を携えて東の門の前に行く。門が開く様子を視角化する。

「おお、汝、無敵の炎の蛇よ。東の門を守護するセラピムよ。

この聖なる囲いに最大限の守護を与え給へ。

われ、汝を呼ばん。失われし聖なる言葉で、汝を招請せん。

神殿に最後の封印をなし給へ。」

蠟燭を携え、南、西、北、東を通過して南に行く。門が開く様子を視角化する。

「おお、汝、無敵の輝ける者よ。南の門を守護するオフアニムよ。

この聖なる囲いに最大限の守護を与え給へ。

われ、汝を呼ばん。トバルカインに鍛えられし最初の剣もて、汝を招請せん。

神殿に最後の封印をなし給へ。」

蠟燭を携え、西、北、東、南を通過して西に行く。門が開く様子を視角化する。

「おお、汝、無敵の裁定者よ。西の門を守護するケルビムよ。

この聖なる囲いに最大限の守護を与え給へ。

われ、汝を呼ばん。第七の海岸の第七の波頭にて、汝を招請せん。

神殿に最後の封印をなし給へ。」

蠟燭を携え、北、東、南、西を通過して北に行く。門が開く様子を視角化する。  
「おお、汝、無敵の四大の王よ。北の門を守護するマラキムよ。  
この聖なる囲いに最大限の守護を与え給へ。  
われ、汝を呼ばん。峻険なる山脈の頂から、海面下の谷間の底から、汝を招請せん。  
神殿に最後の封印をなし給へ。」

蠟燭を携え、東、南、西、北を通過して東に行く。

## (5) 聖 別

すべての封印終了後、3日をおいて、この儀式を1回だけ実施する。  
封印作業と違い何度も繰り返す必要はない。まず、祭壇の上で蠟燭と香炉を焚く。塩水をつくる。

蠟燭を持ち東に行き、一礼する。  
「東方に光あり。」  
蠟燭を持ち南に行き、一礼する。  
「南方に光あり。」  
蠟燭を持ち西に行き、一礼する。  
「西方に光あり。」  
蠟燭を持ち北に行き、一礼する。  
「北方に光あり。」

香炉を持ち東に行き、三度薫香する。  
「東方に力あり。」  
香炉を持ち南に行き、三度薫香する。  
「南方に力あり。」  
香炉を持ち西に行き、三度薫香する。  
「西方に力あり。」  
香炉を持ち北に行き、三度薫香する。  
「北方に力あり。」

塩水を保持し東に行き、水滴を三度切る。  
「東方に生命あり。」  
塩水を保持し南に行き、水滴を三度切る。  
「南方に生命あり。」  
塩水を保持し西に行き、水滴を三度切る。  
「西方に生命あり。」  
塩水を保持し北に行き、水滴を三度切る。  
「北方に生命あり。」

東に行き両腕を左右に広げる。  
「万物の主の御名において、この門は光へと開かれたり。」  
巨大な光の波と香高い風が東から押し寄せ、あなたを呑み込み、全身を浸し、神殿をも満たしていく様子を感じなさい。  
「フィアット フィアット フィアット」  
強い光と風の大波は引いていった。

南に行き両腕を左右に広げる。

「万物の主の御名において、この門は力へと開かれたり。」

巨大な炎の柱が南から押し寄せ。あなたは口を開き炎の塊を肺に吸い込む。細胞の一片一片に浸透し、神殿を熱気で包んでいく様子を感じなさい。

「セラー セラー セラー」

炎の柱は去っていった。

西に行き両腕を左右に広げる。

「万物の主の御名において、この門は形へと開かれたり。」

巨大な大波が西から押し寄せ、あなたを呑み込み、深みに没い、神殿をも満たしていく様子を感じなさい。

「アメン アメン アメン」

大波は引いていった。

北に行き両腕を左右に広げる。

「万物の主の御名において、この門は生命へと開かれたり。」

巨大な悲しみと僅かな希望が北から押し寄せ、地に住まう全ての生命の苦痛があなたを呑み込み、神殿をも満たしていく様子を感じなさい。

「パックス パックス パックス」

大地の悲しみは引いていった。

祭壇の西に行き東に面する。

「われ汝を召喚す。東にラファエル（腕を東に伸ばす。）

われ汝を召喚す。南にミカエル（両足を軸に右に回転し南を向き、腕を南に伸ばす。）

われ汝を召喚す。西にガブリエル（右に回転し西を向き、腕を西に伸ばす。）

われ汝を召喚す。北にアウリエル（右に回転し北を向き、腕を北に伸ばす。）

（右に回転し東に面する。）

この神殿とわれ自身を、至高の光の祭壇に捧げん。」

東に行く、次を宣言し、地の追儼の五芒星を描く。

「夜明けの霊たちよ、わが祝福とともに汝らの世界に戻り給へ。」

南に行く、次を宣言し、地の追儼の五芒星を描く。

「真昼の霊たちよ、わが祝福とともに汝らの世界に戻り給へ。」

西に行く、次を宣言し、地の追儼の五芒星を描く。

「日暮れの霊たちよ、わが祝福とともに汝らの世界に戻り給へ。」

北に行く、次を宣言し、地の追儼の五芒星を描く。

「真夜中の霊たちよ、わが祝福とともに汝らの世界に戻り給へ。」

祭壇の西に行き東に面する。

「地の主アドナイの御名において、この場にもある全てを祝福せん。

この神殿は四大と地の宝果により聖別された。

今より、真摯なる神殿作業が開始されん。」

神殿はそのままの状態で一晩おいておくこと。その晩は、神殿を設定した場所をほかの目的で使用してはいけない。

あなたが望むなら神殿のなかで眠ることができる。その場合、召喚された全ての影響力を神殿の使用者であるあなたの内部で均衡させることができる。

## 8 光体の育成

人間の生物学的肉体の外側に広がる精妙体のことを光体（The Body of Light）と言う。この光体は生物学的肉体と精神の双方の影響を受けて変動する極めてデリケートな波動である。光体の放射特性に注目すると各種のオーラとなる。

この項では、光体を育成する方法について述べる。その方法とは肉体を特殊な姿勢で固定し、想像力と意志力で光体をイメージの世界に押し出すやり方である。基本的な門を通る技法は、これまでもさんざん試したものと同じであるが、今回はシナリオのない旅の過程で霊的案内者または内的助言者を得るように動く。もちろん、ここに書いてあるようにスムーズに霊的案内者が得られれば苦労はない。また、助言する霊が現れた場合でも、それは様々な姿形をとって来る。アメリカ・インディアンのシャーマンたちは様々な力の動物や霊的助手などという人間以外の動物や自然霊が多い。インドの導師は歴史上の高名なヨガや学者を助言者（正確には霊的導師）としている例が多い。先祖の導きを受ける場合もあり、現代のイメージ療法のクライアントは知人や遠い肉親などから助言を受ける場合がある。逆に全く不明な光の波動を浴びたり、声だけが聞こえてくる場合もある。従って、霊的案内者には確定したパターンはない。

かれらの共通項は、直観知（論理に頼らずにダイレクトに認識する力）をもたらしことだ。霊的な衣を無視すれば、それは人間の内的自己の声、無意識の囁きの人格化である。だが、夢の世界でもそうだが、人間は記号の塊である観念そのものを理解する事はない。それが動物や天使であろうと助言する者との対話形式で初めて、愕然と真実に気づく場合が断然多いのだ。

そのために最大限重要なのはリラクゼーションである。深いリラクセス状態で、霊的案内者の姿を想像するのだが、むろん意識的な想像とは全く別の思いもよらない形で現れることもある。

ただし、ドラマティックな形での霊との邂逅を期待しても無駄である。また、霊的案内者は全知全能の主の代理人ではないので多くを期待してもいけない。ただ、現れたものを淡々と受け止め、それと対話してみよう。決して、こうあるべきだという押しつけをしてはいけない。非シナリオ型の瞑想作業は、ありがたみを探るためにあるのだから。

そして、霊的案内者と共同作業を続けていく過程で、あなたの光体は明確化し、育成されていくのである。

この作業は5項の特別な場所の設定、6項の神殿封印／聖別を実施した後に行うこと。従って、第4週以降、引き続き実施することとなる。魔法日記の提出は、この作業終了後である。機械的に1ヶ月間で送ってはいけない。

### ◎ 第1の門：王都の門（東の門）

まず、個人神殿を設定して祭壇を背に東を向いて座る。床に腰を下ろし、両膝を揃えて立て、その膝を両腕で抱え込み、目を閉じて頭を膝の間に落とす。

その姿勢のまま5項のやり方で肉体を弛緩させ、呼吸のリズムをゆっくりと落としていく。瞑想の課程で、眠っても問題はないが、なるべく意識を鮮明なままにしておく。

肉体が弛緩し、心に雑念の音楽が聞こえなくなったら、肉体を殻のように脱ぎ捨て、光体の自分を立ち上がらせ、あなたの特別な場所に向けて、いつもの階段を降り始める。自分の場所で最も居心地の良い座を定めると、そこに東を向いて座る。（東がはっきりと分からなければ、任意の方向を東と決めて行う。）

次に東の空間に門を開く。つまり、正面に東の門を強くイメージする。なかなかイメージできなくても、この門は内的神殿に開く門であり、あなたの心と強く結びついているので決して無理をしてはいけない。慌てずに、徐々に細部が鮮明になるのを待つこと。逆に唐突に出現した場合は、その細部がどんな風に見えるのか確認することに時間をかけること。次に門の彼方に現れる風景を観察する。そして、門の彼方の風景を引き寄せる。細部まで鮮明に見えるまで、どんどん風景をたぐり寄せていく。

門のなかの風景が鮮明になると、その風景のなかから霊的案内者を呼ぶ。これも焦ってはいけない。かれは東の門の守護者である。どんな姿形で現れるか分からないが、11章で述べた

境界の住人と同じ性格を濃厚に宿している。

なかなか現れなければ、あなたが感じた最もありそうな守護者の姿を想像してみる。その姿が風景のなかで、遠くの方に点のように見えて動いている様子を視角化してみる。東の門の守護者は徐々に風景のなかを歩いて（這って／飛んで・・・）くるだろう。そして、その姿はだんだんと鮮明になり、最初の想像通りかもしれないし、信じられないほど奇抜な格好かもしれない。多くの例では風の元素霊の性格を留めていることが多いが、必ずしもそうとは限らない。

東の門の守護者は、門の向こう側の敷居まで来ると止まって敬礼する。（手か、足か、触手か、その他のものを使って敬意を表明する。）

あなたは守護者の特徴を良く観察してから、それに右手で答えてやる。

東の門の上に注目し、その部分にあなたの選んだ紋章を刻み込む。そして、この門を「王都の門」と命名する。これで、東の門はあなた専用の通路となり、門の守護者はあなたの命令に従う。紋章はそのためだけに作ると良い。

ここで一連の作業は終了する。あなたは守護者に別れを告げ、門のなかの風景を遠ざける。その後に門を閉じる。首尾良く門が消えたら、階段を登り、地上の神殿に帰る。そこで光体を肉体の殻に戻し、目覚める。

作業が終わったら、魔法日記に次を記録する。

- ・ 王都の門のスケッチと細部描写
- ・ 門の彼方の風景のスケッチと細部描写
- ・ 守護者のスケッチと細部描写
- ・ 作業時に受けた印象と不具合だった部分

2日目と3日目は、初日で不具合だった部分を埋めてみる。すべて順調ならば、守護者を呼び出して話をしてみる。なお、あなたが門を越えてはいけなく、守護者に門を越えさせて、あなたの場所に進入させてもいけない。

#### ◎ 第2の門：神殿の門（南の門）

全く同じ手順で行う。ただし、個人神殿では祭壇を背に南を向いて座り、南の門を開き、「神殿の門」と命名する。守護者は火の属性を現すかもしれない。

記録は正確に取ること。

#### ◎ 第3の門：星辰の門（西の門）

全く同じ手順で行う。ただし、個人神殿では祭壇を背に西を向いて座り、西の門を開き、「星辰の門」と命名する。守護者は水の属性を現すかもしれない。

記録は正確に取ること。

#### ◎ 第4の門：探求の門（北の門）

全く同じ手順で行う。ただし、個人神殿では祭壇を背に北を向いて座り、北の門を開き、「探求の門」と命名する。守護者は地の属性を現すかもしれない。

記録は正確に取ること。

## 第12ヶ月目の瞑想

### 瞑想課題：ヤコブの梯子

ヤコブの梯子とは、眠りについたヤコブが夢で、つまりアストラル視覚で見た地上と天を結ぶ霊的な絆である。その上を天使が、つまり神意の媒介者が上下している。「梯子が大地の上に立ち、その頂は天に届いていた。」(『創世記』28章12)そして、『ミドラシュ』によると、「その梯子には四つの段がある。」すでに承知のとおり、霊的な進化の階梯も四つである。

この瞑想は本来は、今月の作業と平行して行うべきものだが、作業内容が多くて配分が難しいので、なるべく大きな作業を行わない日中に実施するのが望ましい。いずれも座って行う。

#### ◎ 第1週

自分が大地と天を結ぶ光の柱になった様子を想像する。その柱には微細な光の微粒子が回流しており、上向きの流れと下向きの流れが均衡している。

#### ◎ 第2週

第1週と同じく光の柱と化した自分をイメージするが、その柱の右側に煙の柱を、左に炎の柱を創り出し、ともに天を焦がさんばかりに激しく上昇し、下降する流れをイメージする。右の柱の冷氣と左の柱の熱気を感じる。

#### ◎ 第3週

三つの柱を創造した後に、その柱の四ヶ所を光の横棒で結ぶ。厳密に言うならば、真ん中の光の柱の四ヶ所が膨れて左右の柱を結びつける。その四ヶ所は、あなたの腰を貫通する部分、あなたの胸を貫通する部分、あなたの頭部を貫通する部分、そしてあなたの頭の遥かに上を貫通する部分である。その運動を感じよ。

#### ◎ 第4週

第3週の状態から前方にうつる梯子の影を見る。

空に映る梯子の影に舞う天使の群を幻視する。

意識を肉体の上に立つ梯子と前方の影の梯子に交互に移してみる。

# 今月の読書

今月の学習の参考になる著作は、以下のとおりである。

## 1 必読図書

今月の必読図書はない。

## 2 推薦図書

マイケル・キオニ・ダドリー 『古代ハワイ人の世界観 人と神々と自然の共生する世界』  
たちばな出版、2004年

黒木賢一 『<気>の心理臨床入門』 星和書店、2006年。

**Bardon, Franz. *Initiation into Hermetics*. Salt Lake City : Merkur Publishing, 2001.**

## 第12ヶ月目の課題

この課題は、今月の作業が終了した後に記入しなさい。記入した課題は魔法日記のコピーと一緒に提出すること。

- 1 祈りの力の本質は何だと思うか。
- 2 気概念と魔術的伝統が一致する部分、一致しない部分はそれぞれどこか。
- 3 マナの概念は魔術的伝統に一般化できるか。
- 4 人体の中枢について自分の思うところを書け。
- 5 自分の場所をうまく設定できたか。できなかった場合は、その原因は何だと思うか。
- 6 神殿の封印はうまくできたか。できなかった場合は、その原因は何だと思うか。
- 7 光体の育成において、門の確立と守護者との対面はうまくいったか。できなかった場合は、その原因は何だと思うか。